
天秤にかけられた少女

みんと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天秤にかけられた少女

【Nコード】

N9396C

【作者名】

みんと

【あらすじ】

主は仕事で忙しいので、続きが書けません。応援してくれたら頑張る…ないな…。

1話 始まりの今日（前書き）

文法とかは中卒なのでお察しを、まあその内楽しくなるとおもいますよ？

1話 始まりの今日

午前零時、電灯に虫が本能のままに体当たりし、パチパチとテンポを刻み。

それを促すように風が通り、更にそれを追うように木々に茂った葉がサラサラと音を立てる。

人気のない暗い神社、俺はいつもその石階段に腰を下ろし、そんな自然との調和を感じ、時間を潰していた。

理由なんて。

ただ今、俺の居場所はどんなに鞆を弄っても見つからないから、どこでもいい、誰にも邪魔されることなく、俺がそこに在り続けることができるなら。

それがあの男が俺に与えた唯一の場所ならば、どこだっていい。

本人は何も分からないのだろう、空気が読めない……いや読むという行動事態があの男、父にはないのかもしれない。

両親はほんの数ヶ月前に離婚、今では広すぎて質素なマンションで父と二人暮らしという形になっている。

そんな父は、誰が見ても呆れるようなどうしようもない女垂らしで、毎日のように我家に女性を連れ込み、好き勝手やっている。

そんな空間に居られる訳がない、俺は逃げる、間接的に追い出され

るという選択肢しかなかった。

無関心な父は、俺の内心も知らずに「どこ行くの？」だとさ。

呆れて答える気にもならない。

「散歩」

そう言い放っていつも家をあとにする。

行く当てもなくただ時間が過ぎてゆくのを待つだけだった、そんな毎日。

今日も俺は、缶コーヒー1本で今宵を過ごす。

「冷えるな……」

当然だ、もう10月の下旬なのだから、暖かい部屋、温かい家庭が恋しい。

離婚した理由なんか考えるまでもなく分かる。

不合理な父から精神的なストレス、苦痛を受け、耐え続けていた母だがその信念はもう限界で焼き切れてしまった。

少しの間、別居という形になったがとうとう離婚届けを提出し、今では母と姉で生計を立て、近隣で過ごしている。

そんな二人を不備に思い、たまに足を運ぶこともあるが、希望を失いかけていたとは到底思えない穏やかさだった、父がこの二人にど

んなに影響を与えていたのが手に取るように分かる。

それほどの力が父にはあるのだろっ、そんな父と何で二人暮らしという選択をしたかって？聞いてみようか。

「なあ俺、なんでお前は親父と一緒に暮らすって決めたんだ？」

青黒く澄んだ空を見上げながら自分に問う、その様はまるで生きていることに何も期待していない素振りで、どこからどう見ても精神的にイカしてる奴にしか見えないだろう。

回答は即決だった、何故だろうか、それが答えだと決められていて、それ以外の答えを言うてはならないような、束縛感、窮屈な心。

「金だろ、何にせよ最後にものを言うのは金だよ、マネーさ」

人差し指と親指で円を作りながら自信たっぷりに、そして不安そうにに口ずさむ、独り言って楽しい、そう思うときがある。

その、なんだろうな、考えるよりも言葉にすることで違う考えにたどり着くんだ、でもその考えは縛られた答えにしかすぎない、それでも理性で押さえつけ、それが正だと飲み込む。

「そのわりには不機嫌そうじゃないか、どうしてだ？」

そんな縛られた俺に縛られている理由を問う、何度も言うが答えは決まっている、ただ口にしたいんだ…

「さあな、どうしてだろうな」

ほらな、こうして適当な言葉で終わらされてしまう、そんな自分だが、何故だか嫌いになれなかった、必死に自分で在り続ける為の術だと思っているから。

自分を守ろうという意志なんだと、俺を守ってくれる俺がいるから。

すべて飲み込んでしまおう、そういう意味でやったわけじゃないが缶コーヒを一気に飲み干す、空虚な缶はどんどん冷たくなっている。

音楽でも聴こうとポケットに手を伸ばす、その時だった。

「が、……ていないからじゃないですか…？」

「は？」

突然の透き通った声に俺は思わずそう言ってしまった、そしてそれと同時に疑心が込み上げた。

こんな夜中に、こんな物騒な、人気のない神社で？おいおい、冗談にもほどがあるぜ？

これ結構やばいんじゃない？

やばいだろ？

やばいよな？

心で無駄に会話を交わす俺と俺、兎に角この場から退却せねば、何故なら。

「独り言とか俺：変人じゃねえかああ！！顔見られた？バレてない？なあ？！なあ？！」

ぐだぐだと御託を並べていたが、やはり自分にもプライドとメンタルが存在する、他人にこんな様を見られるのは当然のごとし、快くない。

「そつちですか！」

裏返った声が後頭部に突き刺さる、なんだって、突っ込まれただど？！

じゃあどつちなんだよ、と問いたかったが…。

いや、冷静になっている暇はない、いざ！

颯爽と足を前へ！

「えっ、あつ、ちよっ」

女性の高音域な声が頭に響く

「はっはー、また会おう！」

また会っちゃ駄目だろ…。

「訂正する！さらばだ！つてのわっ！」

その時、足が急に重くなる、というか地に足が着かない…。

映像が上へどんどん上昇していく、当然である、20段ある石階段の13段付近…。

………

………

眩しい…

目を瞑っているのにも関わらず光が差し込み、瞳を刺激する。

鳥のさえずり、暖かい布団、とても安らかだ。

ああ、俺は死んでしまったのか？

まあ「苦」無くして死すつてのは素晴らしいじゃないか、うん。

とりあえず目を開けようか少年。

OK任せな、得意分野だ。

.....

「えーっと？なんだ？」

きつと天井なんだろう、木で出来た天井の木目が俺を睨んでいる。

そして嗅覚を感じ取るに、ちょっと田舎臭く、和を感じさせるような草の臭いがする。

冷たい風が頬を撫でる、とても心地よい。

「きゃっ！生き返った！」

聞き覚えのある高音域な声が耳を攻撃してくる、生き返った？そうか生きてるのか。

いつそのまま死ねたらいいか思っていたのだが、どうやらそうにもいかないらしい。

「そんなの御免だ、死なせてくれ」

目を閉じる。

「え、ちょっと…その…起きてくださいよー」

ああ、面倒だな、月曜日の朝を思い出すぜ…。

「もうちょい寝かせてくれ…」

布団に潜り込み、暖かさを求める。

『ぶおん！ぶふ！』

布団を剥がれる、実に寒い、ああなんか母親によくこんなことされて様な気がする、懐かしいな…寒いけど。

「ほーらー、起きろー！」

『ぶふ！ゴツン！』

枕を引っこ抜かれる、実に痛い、ちなみにこんなことはされなかつ

た気がする…。

「んん…わーったよ、起きる起きる、つつー」

普通ならば焦るところなんだが、寝起きだからそうもいかない訳で…。

「はい、おはようございます、御名前は？」

頭を掻きながら声の主を見極め、聞かれるがままに質問に答える。

「ん…裕登…」

その女性は黒く長い綺麗な髪を身にまとっていた。

「名字は…？」

白い肌、顔はぼやけて良く見えない。

「蔵原…」

だるい。

「じゃあ、おはようございます、蔵原裕登さん」

改まったように朝の挨拶を振られる、なんだか新鮮な気分だな、眠

気もだんだんと薄くなっていくのが分かる、なんだか思い出してき
た。

記憶がよみがえってくる。ああそうそう、昨日の夜中に石階段から
落ちたんだっけか…。

あれからどうなったんだろうか、今日の前にいるこの子が介抱して
くれたんだろう。

「おおはようございます、……」

とりあえずな感じで挨拶を済ませる。

「私は榊原鶯璃さかきはら ひよりです」

ようやく顔がはっきり見えた、真っ黒で繊細な瞳、笑みを浮かべて
こちらを伺っている、まるで天使…言い過ぎか…。

「じゃあ昨夜の声は榊原さんですかね…」

昨夜の俺のイカレっぷりを見たんだろうな…、ああ恥ずかしい。

「はい、昨夜は大変でしたよ、おはようございます」

まあ、そうだよな、あんな夜中だし、人手もなかっただろうに。

「…しゃあないか、で、今日は何日ですか」

何か気に障るようなこと言ってしまったのだろうか、榊原鶯璃は顔を南瓜の様に膨らませていた。

「な、なんだよ…」

「お・は・よ・う・ご・ざ・い・ま・す」

コイツ…めんどくせえ奴だな…。

「ああはい、おはようございます、と」

につこりした、ちょっと可愛いぜ、畜生。

「二日間寝ていましたから、今日は10月の27日ですね」

二日も眠っていたのか、さすがに親父も心配するだろうな、無関心なやつだけど心配症だからな、早く帰ろう。

「あーそうですか、大変な御迷惑お掛けしました、御礼はまた日を

改めて伺います、では」

早々に退散しようと立ち上がる、だが。

腕を掴まれた。

「三日は安静です、あと二日は寝ていて下さい」

そんなことを言われても、もう元気なんだがな、心遣いだけでも感謝しておこう。

それにしても、この上目使いは…悪い気はしないな、ははは。

「か、帰ってから寝ますから、ご心配なく」

兎に角ここには居られない、無関心だろうがお邪魔をしているんだ、礼儀は弁えているつもりだ。

「こらっ！待ちなさい！待てっ！ねえ！」

無愛想に玄関へ向かう。

向かう。

追ってくる彼女。

むかう。

立ち止まる彼女。

玄関はどこだ…！

畜生！かつこ悪いじゃないか！

振り向いて尋ねる。

「げ、玄関はどこですか…」

実に情けない。

「くすっ」

ああ、笑われた、情けない。

「あの、玄関は…」

「ふっ…くっくああはははははは！」

やっぱ死んだ方がマシだったぜ、恥ずかしすぎる。

赤面する俺。

爆笑するコ・イ・ツ

「くっそおおお！笑うなっこの！」

ゲンコツぐりぐりってやつを御見舞いした。

「いたっ、いたいいたいいたい！」

初めてやるが実に気持ちいい、ぐりぐりっとな。

「ほーれほれ、ぐりぐりー、玄関はどこだ、言いたまえ」

「うう…いだだだい！案内しますからっ！」

安堵した俺は頭から手を離す、楽しかったのになあ。

「んじゃ、よろしくううっ、ぐはっ」

めり込んだ、女の拳がめり込んだ。

腹に拳がめり込んだ。

めり込んだ…。

「ぐっ、て、てめえ…」

だんだん意識が薄れていく。

「ふふっ、女性を甘く見ると痛い目に遭いますよ」

以後、俺は相手のことをよく知らない場合、手を出すことをやめると堅く誓った。

数時間後…。

眩しい…

目を瞑っているのにも関わらず光が差し込み、瞳を刺激する。

鳥のさえずりは聴こえないが、暖かい布団、とても安らかだ。

あれ、こんな御託さつきも並べなかったか？

………

もういい、ガバっとなんて身体を起こす。

なんだかイライラしてきたぞ

「お目覚めですか？」

にっこりしてやがるぞコイツ…！

「お目覚めです」

にっこりを返してやった。

「…っ」

思いつきり引かれたんだが…。

「いや、なんでもない…聞き流してくれ…」

苦笑いする榊原…。

失笑する俺…。

「あー、今日は安静にしていますから」

正直、腹殴られて気持ち悪い、嘔吐しそうだ…。

「はい！今食事もって来ますね！」

「ああ、いや、食事はいいよ…って…」

もう彼女の姿はなかった。まあなんだ、素直にしていれば可愛い子じゃないか。

正直、食は進まないが、仕方ないか。

どうやらあの子はこの神社に住んでるみたいだけど…。

辺りを見回してみる、広い庭に小川のせせらぎも聴こえる、とても心地よい場所だ、国に一つ在るか無いかと言う位とても立派な神社である。

榊原鶯璃は見た印象ではドジッ子のような性格な気もする、それ故に優しい顔立ちである。

クラスに一人は居るキャラだ、悪い印象では決してない。

しかしシャツにカーディガン、ロングスカートといった地味な服装である。

実に惜しい…俺なら…。

くだらん分析はいらん、早く親父と連絡を取らないと。

「つと、携帯携帯…」

ジャケットのポケットをあさり、携帯電話を取り出す。

『プルルルルル…』

通話相手が誰であろうと、この呼び出し時間が緊張する。

「も、もしもし裕登か?!今まで何してたんだ連絡もしないで!」

予想通りの言動である、なんだかんだで父は俺の父であるのだ、いくら気が使えなくて、間接的に俺に陰悪感を与えていようと、俺のただ一人の『親』であることに変わりはなかった。

そもそも心配するなら俺を家から追い出すような真似はするなと…、言っても本人はデリカシーの欠片もないから無理な話なんだが…。

「ああ、ごめん、それがいろいろあつてさ、明日には帰るよ、心配しないで」

「いろいろつてなんだ？お父さん心配してたんだぞ！警察にもいったんだぞ！」

ああ、うるせえな…心配かけたのは悪かったけど、うざい…。人の優しさというのは時に重く押し掛かり、邪魔になり、いらなくなり。

「明日話すから、今仕事中だろ、切るよ」

『プツッ』

返事も待たずに終話ボタンを押す。

「はあ…」

携帯の黒い画面を見つめ、深く溜息をついた、何度もついてみた。

それにしてもこのまま安静にしてると言われても、なにをしてればいいのか。

今の時刻はもう零時近い、本当に邪魔者だな俺は…。

ここは客間じゃないようだが、榊原の部屋なんだろうな、ドレスサ
ーなどがとても女の子染みた感じだ、それと壁に巫女が着るような
服が掛けてあるな。

和室なのは当然だが俺の部屋に比べて相当綺麗にしてある、まあ俺
の部屋と比べるのも変な話だが…。

このなんだろうか、女性の部屋って全体的にピンクがかった感じに
見えるんだよね…。

いい臭いはするし、この布団とかもあの子のじゃ…。

でもドアがないのはプライベート的には痛いな、襦じゃなにかと不
備だろうな。

しばらくするとドタドタと足音が迫って来た、榊原が戻ってきたよ
うだ。

部屋に入り早々、食事を並べていく。

「はい、ご飯ですよ、栄養付けてくださいね!」

まるで母親の様なこと言う、懐かしい気持ちに浸っていた。

焼き魚に白いご飯、漬物に味噌汁。

実にシンプル、今時ありえねえ…

俺は魚が嫌いだ、骨が邪魔でたまらん、しかしプライドに懸けて食

う、別に食べれない訳じゃない。

箸を取る。

……

「じーーーーー」

なんでこんなに見られてるんだ、これじゃ食べもしない

「あのさ、ずっと見るのやめてくれないか」

「ほえ？」

まただ、可愛い…悔しい…畜生

気をそらすために話でもしながら食つか。

「榊原さんはこの神社の巫女さんなのか？」

「はい」

「へえ、そうかい、学校は？」

何食わぬ顔で漬物に箸を伸ばす。

「当然中学校までは行きました、今は巫女の仕事で忙しいので高校には行ってません」

なるほど、就職先が決定済みってか、いいな。

ってか漬物美味い…！

「おほおー」

漬物をほおりながら話す…行儀悪いな俺。

「蔵原さんは学校に行かれていますか？」

「行つてたらこんなのんびりしてないって」

そつ、俺も中卒だ、高校には行つたんだが2ヶ月たらずで辞めたんだ。

今は無職のフリーターってな…

「そうですね、くすっ」

この笑顔が愛らしい、こちらまで自然と笑顔になってしまう。

「そついえば歳はいくつなんだ？俺は今年で17だけど」

よく若者はこんなことを話題に上げて話を広げていくと聞いた。

「私も今年で17です、同い年だったんですねー」

これは予想外…でもないが同い年と分かるとなんだか照れてしまう。

「でも、ちよつと大人っぽかったので19歳位だと思ってました」

よく言われる、ませてるって言うのかな、昔からそうだった。

小学生の頃から俺は心の成長が少し早かった、ませてる訳ではない、本当に心から大人に近づいていたのだ。

でも性格などはみんなと同じ、やんちゃな小学生である、考えが大人なだけだった。

それ故にみんなと意気が合わなかった、虐められた、弄られた……

普通じゃないとハブられた。

俺は思っていた、みんなに心が180度勝っているから正反対な考えに至り、意気が合わない。

みんなに心が180度劣っているから意気が合わない。

そんな人達を俺はこの目で見て、体験している。

だから、俺は虐められている子をかばったこともあった。

虐めにはもう慣れた、でも他のみんなには慣れて欲しくない、この気持ちが高行に走るかもしれないからだ。

自分は普通じゃないなんて思ってた欲しくなかった。

ただそれだけだ。

まあ今では虐められないような対応の仕方を身に付けている。

「じゃあ敬語はやめようぜ、鶉璃って呼んでいいかな？ 榊原じゃ呼びにくくてさ」

「はい、じゃあ私も裕登さんって呼びますね」

照れる、赤面を隠せない、とりあえず手で顔を仰ぐ。

「暑いな、今日は…」

「そうですか？ もう10月の下旬ですよ、顔赤いですね、大丈夫ですか？」

ああ、畜生、顔近づけるな。

「なっ、なあ、敬語のままだぞ」

「これが普通になってますから、しょうがないんです」

「ま、まあ、いいか」

同様しまくってる、心臓がバクバク鳴っている。

「すうー、はあー」

深呼吸……深く深く深呼吸…。

鵜璃が俺の様子に気付く。

「??…すうー、はあー」

いや、真似しなくていいから…。

そういえばこの神社の敷地内に入ったのは初めてだ、いつも石段までしか行った事がない。

「あのさー、ちょっとそこら辺散歩してもいいか？外の空気が吸いたい」

「はい、構いませんけど、食事が済んでからです」

話に夢中…いや、この子に夢中で手が動いていなかった

「っと、悪い悪い、食つよ」

また箸を動かす

……

「じーーーーー」

まただ、もうマジで照れる

「あのな……」

「にこっ」

うっはー、その笑顔100点満点!!
GOOD!GOOD!

しかし食べづらい、悪い気はしないんだがな……気にせず……いや、気になるが、食うことにした……。

味噌汁を一気に飲み干す、その流れで白いご飯を食いまくる……

そんな俺を鵜瑠は興味津々な目で見つめている、なんなんだコイツ？俺に惚れてんのか？
なんてな……

そんなことより、正直おかずが少なすぎやしないか、いや焼き魚がそうなんだろうが、やはり焼き魚が残る、いや、食うぞ当然。

箸で魚の腹をえぐる。

切開。

食う。

そしてなぜか…。

「おーーーーー、裕登さん魚食べられるんですか」

突然なにを言い出すのかと思いきや、変なことを言うな。

「当たり前だろ、鵜璃は食えないのか？」

「食べれません！そんな骨だらけなもの！」

俺も心から同意している、しかし、大人（笑）として指導せねば。
というか焼き魚が食えるか食えないかで興味津々だった訳か……さ
つきまで勘違いしてた俺が情けない。

「おいおい、食べ物で粗末にしちゃいけないな、ほら食べてみるよ」

焼き魚を差し出す……まあ俺が食いたくないだけなんだがな。

「うぐう、嫌です、それだけは嫌です！」

「だめだ！食べたくても食べられない子供もいるんだぞ！」

なんというお決まり台詞、我ながら微笑。。。

皿を持って鵜璃の顔に近づける、ほれほれ。

「ほら食えって、美味いぞ、骨取ってやるから」

と、骨を取って身だけを差し出す、つもりだった。

「ほら、あーん」

やってて恥ずかしかったが気にしない

「あ、あーむ…むぐ、んぐっ！」

あ、骨が残っていた。

「げほっげはっ、骨入ってるじゃないですかあ！」

鵜璃の口から魚の身が飛び出す…。

「じゃねえよ！吐くなよ、きたねえな！」

素で思った、汚いと…。

これはひどい。

女性が吐くなんて……。

「みずうつうつ！水はああああ！」

「おいおい落ち着けて」

「ぎゃあああああああああああ」

なんで魚なんかでここまで……。

和やかな雰囲気の中、ある雑音と共に頭をよぎった。

この神社には鶉璃しかないのか？

神主はどうしたんだ？

こんな馬鹿でかい神社なんだ、もっと沢山居るはずだ。

足音……

なんだこの爆音と化した足音は……

気持ちがそわそわした。

『ドタバタドタバタ!』

鶉璃はまだ騒いでいる…

「お、おい…」

「いやあああ、不味iiiiiiii!」

『ドンッ!』

ふすまが壊れるかと思うくらい大きな音だった。

「?!」

「うるせえええ!!!!」

.....

無音、と言っべきだろうか。

たった3秒…その時間が長く、止まったようにも感じた。。。

二十歳位の若い男性が凄い勢いで入ってくる。

「…っ！」

鶯璃は目を見開き、後ずさる。

叫んだ男は鶯璃を追いかけて長い髪を掴み引き寄せる。

「うぐうっ！」

「てめえ！今何時だと思ってんだよ！うるせえんだよ！糞やろう！」

『ドスッ』

生々しい音が聞こえた。

殴る…女性を拳で…？

鶯璃はふすまに向かって吹っ飛ぶ。

「いやぁー！」

細く長い黒髪が何本か抜け落ちる。

「生きてるだけで幸せと思え！この疫病神が！」

映像がまるで早送りで再生されているようにどんどんと展開していく。

え？

なんだよ？

『そいつ』は鶯璃をゴキブリかなにかのように見下している。

俺は何が起こったか、把握しきれない、ただそこに居るだけでしかない。

『ガストドカツ！』

「いたっ、ごめんなさい！」

「今日は何曜日だと思ってんだ！土曜だぞおい！式があるんだよ、ああ！？寝坊したらどうすんだよっ！」

…その光景は俺が見て体験してきたものとは全く違うもので、虐めなんかじゃない……

「虐待だ」

「鶯璃っ……！」

慌てて鶉璃に駆け寄り、彼女の体は震えている。

「…ごめん…なさい…さい…ひっく…ごめんなさい…ごめん…ちい…」

彼女は俯いたまま謝り続ける。

口に血を滲ませながら…

何度も。。。何度も。。。

うるさかったからって何もここまで…。

「小僧！もう動けるんならとっとと帰れ！邪魔だ！」

「…っ?!」

「そいつ」の矛先は俺に向けられた、逃げ出したかった。

怖かった。

一人の少女が酷い目に遭っているのにも関わらず、関係ないなどと自分を納得させて。

子供に踏まれそうになって必死で逃げる蟻のように俺は…。

俺は、泣き叫ぶ鶯璃を尻目に逃げ出した……。

どんなに走っても走っても…どんなに遠く離れても…鶯璃の泣き叫ぶ声が聴こえてくる…。

畜生！なんで俺は逃げてるんだっ？！

違っただろっ！！今は鶯璃を助けることが第一だろうがっ！

戻れっ！俺！動けっ！そっちじゃないっ！

なんでだよ…！なんで思い通りに動かないんだ…！

俺はいつまでも縛られてなきゃいけないのかよっ！

自分の足で歩くことは許されないのかっ？！

そうか…俺は束縛された人間…分かっているけど違う答えを正として飲み込む…

こんな時くらい…っ！

「ちつくしゅおおおおおおおお！」

自分の弱さに失望した。

なんで。

あんな、酷い。

いったい何が…？

「う…ぐ…おえ！」

嘔吐した、頭の中がぐるぐるしている、それでも俺の足は止まらない…。

そして足もよろよとした足取りで、電柱に身体を打ち付ける。

「うつ…！」

足が藁になり、その場で潰れてしまった、わからない、思考回路が欠落していくのが分かる。

畜生！畜生！畜生！

もう、気が動転していて、動くことができない、気持ち悪い、気持ち悪い。

ただ悔しさが俺を汚染してゆく、涙を流し、嘔吐し。

仰向けになり、赤黒い空を見上げる…。

だんだんと気が遠のいてゆく……月がぼやけて……。

1話 始まりの今日（後書き）

いかがでしょうか？

シリアスだったりするんですよ？

感想いただけたらうれしいです。

2話 矛盾と決意（前書き）

ちよつと急展開すぎたかな、まあそれはこの小説の味と言つことで
解釈をよろしくお願いします。

2話 矛盾と決意

静寂が続く空間、終わりが見えない物語、突然幕を閉じてしまう舞台、そんな場所。

この感覚はきつと夢の中なのだろう、夢の中で自覚が持てるようだ、こういった状態は白昼夢と呼ばれているそうだ。

夢の中の自分を自覚することでこの世界をコントロールすることも可能だという、だがこの世界はどうやら無理なようだ、何を願おうともこれっぽっちも展開しない。

心の根源では願っているのかもしれない、ただ何を望んでいるのか、求めているのか、それを自覚することは出来なかった。

とは言ったものの、自らの意思では目を覚ますことはできないというのが夢の厄介なところ、俺は気長に待つしかなかったのだ。

ふわふわとした気分の中、モザイクが少しずつ剥がれ落ちていき、ようやくこの世界の地に足を着くことができた。

俺の五感が間違っていないければきつとここは神社の境内、ということになる、現実にもこここの付近まで足を運んだこともあるので確かはずだ。

毎晩ここの神社の石階段で時間潰していたことはあったが、境内に来たのは初めてかもしれない、新しい風景に心躍らされ、少し歩いてみたくなった。

どんどん足を歩ませることで感じるものがあつた、それはこの世界には風や音が無いのだ。

人工的に造られたような小川が流れているが、せせらぎさえも聴こえない。

無音の世界　　。

それを理解したと同時に、この世界のコントラストが単調になっていくのが分かる、それは幻想的に、残酷的に、だんだんと世界が色あせていく……

白と黒しかないモノクロの世界、音も風もない悲しい世界、その中で俺は動揺を隠せなかったが、夢であることを忘れなければ何も躊躇うことなく歩み続けることができた。

ふと、歩を進めると、この無音の世界に音が生まれた。

聴覚を揺るがすようにそれは聴こえた、聴いているだけでこちらも不快になってしまうような音……

誰でも体験したことはあるだろう、ショッピングモールや公園などで、わんわんと嘆く幼い子供泣き声を、それを見て聴いていると、こちらまでも不快な気分になってしまう。

そう、つまりその音の主とは、女性の泣き声なのだ。

俺はその泣き声に鎖で引つ張られているかのように前進していく。

やがて神社の裏にたどり着いた、そこに見えるのは何とも言えない大きな樹と、巫女の姿をした二十代くらいの女性だった。

少しずつ近づくにつれて様子が伺えた、彼女は樹に寄り添っている、涙を流し、まるでその樹を惜しむかのように…

なにか悲しいことでもあったのだろうか、このまま見てるだけだと不快なまま終わってしまうので話しかけてみることにした。

「どうかなされましたか？」

彼女の後ろ姿はどこかで見たことあるような気がした、肩をすくめて小さくなっている、よほど辛いことがあったのだろう。

痛み、悲しみ、憎しみ、企み、哀しみ、悔しみ、そして孤独。

彼女は負の感情だけを背負い込み、背負いきれないものは両手で抱えている、それはとても重いだろう、しかしそれは彼女の使命、いや死命なのか…。

俺は彼女を知っているわけではない、でもあの後姿を見るだけで分かってしまうのだ。

「?!」

彼女は俺の存在に全く気付かなかっただけで、身体をビクッとさせて驚いた、何かに恐れているような、まるで駆除を恐れているような鼠の样だった。

「ああ、ごめんなさい驚かしてしまつて、あなたが泣いていて見放す訳にはいかなかったのでつい声をかけてしまいました」

「…あ、いえ、その…ごめんなさい、本当に驚いてしまつて」

急に謝られるとこちらも謝罪の気持ちでいっぱいになつてしまふ、いったいどれくらいの時間泣いていたのだろう、目は真っ赤で、顔はくしゃくしゃで、泣き疲れているようでもあった。

「ほら、顔がくしゃくしゃですよ、いったいどうしたんです？」

気が利かないのでハンカチは用意できなかった、彼女は服の袖で涙を拭い、こちらに真つ直ぐ視線を向けるが、彼女の目からは涙が溢れ出てきてとまらない、それでも必死に涙を拭い俺にこう言った。

「私、もうすぐ死ぬんです」

俺は驚愕した、彼女の言葉ではない、音も色もないこの世界が彼女が発した言葉と同時に生き返つたのだ、風が俺の髪をかき上げる、鮮やかな色、小川のせせらぎ、聴こえる…聴こえる。

そして桜が舞い散る、風と共に……

言葉を失った、この世界は美しい。

そして彼女の言ったこと、ただ分かることは、決して嘘ではないと

いうこと、一言に死ぬと言っても、人間はいずれ死ぬものだ、彼女の声色からは自殺という死は正解ではないだろう、そうなると誰かに命を狙われている、病気で余命が短いなどが妥当だろう。

「っ……」

ああ、こういう時ってなんて言えば良いんだろうか、頭の中で言葉のパズルを始めるが、彼女の眼差しは俺に考える時間を与えてはくれなかった。

「そうなんですか」

分からなかった、これが今の俺の精一杯の一言、だが彼女は残念そうな顔を浮かべていた、俺に何を期待していたのだろうか？

「そんなことない」

彼女が口を開く。

「そんなことないって、言っただけでした」

心を読まれたようだった、確かにそれが最善の言葉だったのかもしれない、しかし死ぬということを他人の俺が否定する、それはなにかやってはいけないことのように思えたのだった。

俺は間違っただけじゃないはずだ、絶対に、きっと、多分。

言葉が段々と弱くなっていく、この時点で俺は理解した、俺ははっきりとした自分の意思を持っていない、言葉で言いくるめるならば優柔不断なのだと。

「ふむ…でも、そう言っても何も変わらない、そうじゃないですか？」

彼女に凶星を突かれてしまったからだろうか、異様に悔しさが込み上げた、だっておかしいじゃないか、自分から死ぬって宣言したんだ、俺がここでそれを否定してもその事柄が変わるわけでもない、故に今ここでは自分の意思を通さなければ気がすまなかった、彼女に否定の言葉を向けることは決して間違いではない。

しかし彼女の目は俺を哀れむかのように見つめている、その目は冷静で、恐ろしくて、優しく、心を見透かされているようだ。

「変わりますよ…」

「ッ…?!」

とてもつい数秒前まで泣いていたとは思えないほど彼女は微笑んでいた。

突然の微笑みに俺は動揺してしまった、この女性は俺に何を伝えたいのだろうか、俺の夢に入り込んできてまで言いたいこととはなん

なのだろう。

そもそもこれは俺の夢、俺が彼女を創造し、作ってしまったというのか？

夢だと自覚してしまうことで余計に複雑で、自分の心理状態が今どうなっているのかさっぱり分からなくなってしまう、きっとこれは誰かの夢の中に俺が、それとも俺の夢のなかに誰かが、ああ分らない。

兎にも角にもこれは俺だけの夢じゃないんだ、他人を俺が決めて言い訳がない。

「俺にそんな権限はないですよ…」

俺は否定する訳でも肯定するわけでもなく、自分自身の存在をこの世界から否定することにした、こうしていれば過去の自分もこれらの自分も、平行線で保てるだろう、俺は変わらなくてもいい、もうこれ以上は…

「くすつ、いいえ、だってこれは…」

彼女は俺を馬鹿にするように可愛らしく、頬を赤らめながら音を発した。

「あなたの、夢ですから…」

その一言で俺は確信した、これは誰の夢でもなく、やっぱり俺の夢なのだと、誰かに言ってもらいやつと気付く事ができたのだ、どうせ単なる夢に過ぎないのだ。

「俺の夢ですか」

「はい、あなたの夢です」

彼女は微笑んだ、俺もつられて微笑む、こんな時間も悪くない、この世界には俺と彼女の二人だけだったが、十二文に幸せというものを感じることができたのだ、俺は声ならない声で彼女に問う。

『御名前は？』

彼女は笑みを浮かべこういった。

「私は、あなたの夢ですよ」

太陽のような彼女の笑顔、そんな時間はどうやら終わってしまうようだ、俺は彼女に何も言わず微笑みかけた、また会いましょう、そんな意味合いを込めて。

懐中時計が割れるような感覚と共に、この世界は硝子の破片になり、散っていった。

.....

「んっぐっ」

分かっていた、眠りから覚めたことが、とても心地よい気持ちで寝ていたようだ。

「ふああーああ、あれ？俺どうしたんだっけ？」

ここは俺の部屋のベッド、湿気でへなへなの布団で寒い、背伸びをしてるうちにだんだんと記憶が蘇る。

「あ……」

そう、俺は逃げてたのだ、それで吐き気がして、気絶して、でも誰がここまで俺を？

まあ、ぶっ倒れてたら誰でも警察かなんかに電話するよな。

『ガチャ!』

もの凄い勢いでドアが開く、反射的に俺は怖くなった。
あの時の爆音がまだ耳から離れない。。。

「裕登! 起きたか! 大丈夫か?!」

その声は、あの時のようなものではなく、親父だった。
安心して、力が抜けてくる。

「あ、ああ、大丈夫だ、それで今日は何日?」

いったい、どれくらい寝ていたのだろうか、あれからあの子、鶉璃
は大丈夫なのだろうか。

「お医者様はただの精神的疲労と打撲があるだけと言っていたから、
ああ、無事でよかった」

「なあ、今日は何日だ?」

一瞬無視されたので、キレ気味に言ってみる。

「あ、ああ、今日は10月28日だよ、まる一日寝ていたからね」

「それでここには誰が?」

重要なのはここだった、あんな夜中にあんな場所で俺を見つけてく
れる人はいったいどんな人だったのだろうか、とても迷惑を掛けて

しまったらう、御礼を言わないと。

「最初に見つけてくれたのは裕登と同じ歳くらいの女の子だったって聞いたよ、学生だそうだよ、放課後また様子見に来るって言うてたから、その時はちゃんと御礼を言いなさい、わかったね」

「ああ、分かったよ、御礼はちゃんとしておく…というか親父、仕事は？休日出勤だろ？早く行けよ」

今日は日曜、まあ連日休みの俺には関係ない話だけどね、親父がいったいどんな仕事をしているのかは興味がないので知りもしないが、カレンダーに出勤の文字が書いてあったことを思い出した。

「ああ、大丈夫そうなら父さんは行くよ、あとでその子が来るから、寝てるんじゃないぞ」

「母さ…」

母さんには連絡したのだろうか、そう思っただけだった、まあ多分連絡はしてないと踏んだ、なにせもうコイツは母さんとは他人なのだから、俺を母と引き離すようにいつも行動しているように見える、俺はコイツに縛られているのか。

「ん？傘？」

「いや、ごめん、なんでもない、はやく行けよ」

「おう、行ってくる」

『ガチャン、ガチャ』

玄関の鍵が閉まる音と共に部屋内はしーんとなった、音がないと色々考えてしまう。

鵜璃のこと…

あの神社の名前なんだったかな、いつも行くけど知らないな、現在午後三時、日曜の部活ってこれくらいに終わるんじゃないか？

『ピンポーン』

とか思っているうちに来たみたいだ、親父と入れ替わりに来てくれると退屈せずに済む。

『ピンポーン』

「はいはい、ちょっと待ってって」

『ピンポピピピンポーン』

「ああああ！何だようぜえな！」

『ガチャ』

「はいはい！つてえ…」

一瞬思考回路が停止してしまった、見慣れた姿が見慣れない時に現れたからだ。

「い、こんにちは」

その声の主は……

「ひ、久しぶり、えへへ…寝てると思ってたよ」

「つ、月代…ひ、久しぶり…」

彼女は制服姿のセミロングで少し茶色っぽい髪の毛、弱々しいが芯をしっかりと保って立つその姿、白い肌に健康的な足、可愛い顔立ちをした元気な奴で、そこにいるだけで和やかな雰囲気になる、これもクラスに一人はいるだろ？

気まずい雰囲気の流れる、なぜなら…

手短に言えば中学時代、俺はこの女、月代千代美つきしろ ちよみに恋していたまあ、これが初恋ってやつだろう、心から守りたいか思ってたたりした、そんなある日、ついに俺は告白とやらに挑戦することにしたのだ。

結果は、あっさり振られたのだが、それでも諦めていなかった俺がいた、それからのこと高校生になってバラバラになって、それっきりだ。

たまに俺からの一方的なメールで会話をしていたが、やはりあちらからすれば気まずいようだ、実際に会うのはこれが2年ぶりだ。

「と、とりあえずあがれよ、寒いだろ」

「う、うん、お邪魔しまーす」

邪魔なもんか、大歓迎だ、リビングまでエスコートし、ソファに腰掛けてもらう、心臓バクバクなのだがここまできたらやけだ、普段通り、平常心。

「まあさ、とりあえず御礼を言っておくよ、ありがとう」

赤面は隠せないでいた。

「う、うん、どういたしまして」

……

会話が……ない……

これはまずい、非常事態だ、何か話題を作らなくては！

うおお、思いつかねえ……この平然とした無機質な空間が焦燥感を駆り立てる、そつだ学校のことでも聞くか。

「「あのさ」「

だああああ！なんで被るんだよ！

「な、なに?!」

手を口の前であたふたさせながら、そして口をパクパクさせて、金魚状態になっている。

「いや俺の方はどうでもいいんだ、そっちがどうぞ」

「え、いや、そんな私もどうでもいいから」

「そ、そうか…」

………

何かがこみ上げてくる、この気持ちはいったい…まさかっ?!

「つくつく…ふふふっ」

「くくっははっ」

噛み合わなすぎて笑いだしたのだ。

「おつかしーい！あはははは！」

「ったくなんだよ二人してよ！はっはっは！」

他愛もない笑顔と笑い声がリビングに響く、おかげで気が楽になった、仕切りなおして問いかける。

「それで、なんだよ月代」

「あ、うん、なんであんなところで気絶してたのかなーって」

…あまり触れて欲しくない話だった、俺は鴨璃を…見捨てた。

逃げた…

「いやーちよつと転んじやってさあー！」

妥当な言い訳だと思うぞ、そうだろ？

「えー、ほんとにー？ありえないよー！」

「いやいやマジだつて、当たり前所悪くてさ」

テンション頼りで話を進めていく、多分月代もなにかと気は遣っているんだろう。

「ふーん、まあいいけどねっ」

月代って俺と話すの苦手だったはずんだけどな、告白されて振った相手とはなかなかコミュニケーションって取りづらいだろ？

普通の会話に聞こえるかもしれないが、ここまで話すのは滅多になり、メールもすぐに終了するし、内容もいいものじゃない。

会わない間に俺の株急上昇したか、何かが起こったようだ、よく分からぬがこれほど嬉しいことはない。

「そつえば、警察でも呼んだのか？」

あまり警察にはご厄介になりたくはなかった、なぜなら俺は一度だけ警察で事情聴取をされたことがあったからだ、あれは本当に酷い、

仕事上警察は疑って掛かるものなのだが、こちらの言い分はまったく聞こうとしないのだ。

「ううん、直接蔵原くんのお父さんに電話したよ」

「ええ？なんで俺の親父の電話番号知ってるんだよ？」

最近の学校では連絡網などの個人情報を表示するものは犯罪などに使われる可能性があるので配布されてはいなかったはずなのだが。

「え、だって、あ……」

月代は顔を真っ赤に染めた、そして黙り込む、どうしたのだろうか、チャックでも開いてたかな、んな訳ない、第一親父の番号なんて俺の携帯のメモリくらいにしか入っていないはずだ。

ん……？

あ……？

やべ……

俺は赤面する、といつても元々真っ赤だけどな。

「その…やっぱり見た…？」

恐る恐る問いただす。

「う、うん、ごめん」

終わった。

俺の人生終了だ。

「ごめん、俺、変態だよな…」

深い溜息と共に言う、そう、長年愛用してきた俺の携帯電話だが俺は特に携帯を利用することもなかったので待ち受け画像は中学生からそのままなのだ、そしてその待ち受けなのだが、その正体は。

月代千代美だったのだ。

そう、2年経とうというのにも関わらず、まだ俺は月代のことを諦め切れなかった、本当に好きだった。当然変態だ、そう言われると思っていた、でも。

「うっん、そんなことないよ!」

「え?」

意外な発言だった、耳でも悪いのだろうか…

「だって、その、まだ私のこと…好きでいてくれてるんだなーって、引くどころじゃなくて嬉しいよ私は!」

ああ、なんて良い子なんだろうか、抱きしめてやりたい、救われた、女神だ、やっぱり好きだ。

気を遣ってくれているのだろうか、とてもありがたい御言葉…!

「私、いろんな人から告白されてきたけどみんな断ってきたの、でもここまで諦めないで好いてくれるのは、蔵原くんだけだよ…!」

な、なんか照れてきたぞおい。

「あ、うん、そうか…ちょっと安心した…」

ああ、これで俺の株が上がったんだろうな…恥ずかしい…

人間ってのは直接褒められるのと間接的に褒められるのでは、間接

的の方がとても好印象なのだ、これで株を上げる奴も少なくない、いや、俺は意図的にやった訳じゃないぞ。

顔をそらしながら、月代に視線を向ける、彼女は黒いまんまるな目で俺を見上げる、手を握り締めてまるで告白でもしているかの様な顔つきで俺を見る、ああ、その上目遣いはやめてくれ、頭がパンクする。

……

さて、どうしたことが、見つめ合うだけで時間が過ぎていく…

「あああ！そうだ！蔵原くん！起きてからまだご飯食べてないでしょ？！」

確かに腹が減った、いろいろと疲れたしな、もう二日は何も食べてない、よく平然としていられるものだ。

「ああ、そういえば食べてないな」

「そそ、それで、もも、もし良かったらでいいんだけど、こ、こ、これからご飯食べに行かないっ？わ、わ私も部活帰りでお、おおなか空いてるんだよねっ」

もうちょっと落ち着いたらどうなんだ、彼女の姿はまるでロボットで、失敗作で、これはこれで面白かった、堪え切れなかった。

「くっくくはははははー！」

寛大に笑った、もう可笑しかった。

「え、な、なに?! なんか変なこと言った?!」

「いや…いや…くつくく…だつてさ、月代すげえ慌ててるもんだからさつくははは!」

「なっ! ん…、えへへ…」

えへへ、だと、可愛過ぎる!

「すうー」

深呼吸してもう一度言ってきた。

「これから食事に行きませんか?」

なんで敬語なんだよ、もう笑いが止まらない。

「くつはは! よ、よろこんでええ! くくくつ」

「もー、ちょっとしつこいよー! いじわるうー」

俺も自重することにした、女の子って弄るのが楽しいんだよね…。

「悪い悪い、じゃあちよつと準備するからソファで待っていてくれよ」

「うん、分かった、早くしてねっ! 女を待たせたら罰金だよー」

そんな法律ねーよ、とかいいながらウキウキ気分な俺、子供の頃に遊園地に行くような気分浸っていた。

「あいよー」

月代をリビングに残して部屋に入る。

「待たせちゃ悪いからな、早く着替えよう」

……

パジャマをGパンツにチェンジ！
シャツをYシャツにチェ…

『ピロロロロロロ』

「あ、電話だ、出ないと」

そして俺はやらかした、上半身裸でリビングの電話に向かう。。。

「きゃああ！エッチー！」

で、ですよねー…

「す、すまんすまん！電話がさ！」

電話はあと回しだ先に着替えてこよう…！
慌てて部屋に戻る、それと同時に電話の音が鳴り止む。

「ありゃ…まあいいか、どうせ大した電話じゃないだろうからな」

変身完了だぜ、さあいざお食事へ！

「準備できたぞー行こうぜー」

「は、はい！」

あちゃーまた緊張してるな……

俺が悪いのか、なんか前よりも月代、外交的になったかもしれないな。

玄関に行くと同時に俺は気付く。

「あ…靴がねえ…」

あの時は必死だったからな…裸足でよく走っていられたもんだ。

「……ん、ばか…」

月代が何かつぶやいた気がした。

「ん？どうした？」

少し様子が変わった、ちょっと寂しげな…

「うつん、なんでもないの、早くいこっ」

「あ、ああ」

靴箱から予備の靴を取り出し、難なく外に出てドアに鍵をする。

『ガチャ』

「それで、どこに行くんだ？」

食事といっても、若者だから一応、俺は牛井とかでもぜんぜん構わないのだが、女の子となるとやはり喫茶店とか、量が少ない割りに高いレストランが好きなんだろうな…

「ちょっと前に新しくできたファミレスがあるんだよ、デパートの屋上だから景色もいいよー」

「ほーそりゃ楽しみだな」

「ちょっと歩くけど、大丈夫だよー男の子！」

正直なにも食っていないので、足取りは覚束無いが、意地を見せようと気を張る。

「ったりめーだ、そっちこそ大丈夫かよ女の子！」

「にひひ、ったりめーだあ！」

うは、不意打ちかよ、これがあの、も、萌えってやつか…?!

なでなでしたくなるぜ。

……

マンションのエントランスを出て、月代を先頭に俺はヒョロヒョロと付いていく、彼女の後ろ姿はとても魅力的で…どこか寂しそうで…。

特に会話もすることなく時間が過ぎる。普通なら会話がないと気まぐずいとか、そういう気分になるんだろうが、俺の気まぐれさからなのか分からないがそれで良かった。

そばにいただけで安心できる存在というのか、月代も特に気まずそうな表情はしていなかった。

「この先だよー」

ふと、気付くと来たところのない場所に來ていた。パッと見なのだが長い坂があり地平線がもう…な状態だった。

「こ、これか…結構長い道のりになりそうだな、上等じゃねえか」

「怖気付いた？」

ひょこつと俺の顔を覗き込む、笑顔だった。少し安心する、さっきまで様子が変だったからな。

「ああ、正直腹が減ってるから最後まで持つかどうか心配なところだ…」

「くすっ、着いたら沢山食べようね」

「おつよー!」

坂道を登る…

登る…

歩く…

二十分後…

『ブオオオン』

異質で巨大な良く聴く機会音。

「……」

「なあ…？」

長い道のりで疲労はMAXに達していた。

「な、なにかな？」

「今俺達の横をスーッと横切ったのはなんでしょう」

満面の笑みだった、表面上はな…

「ば、バスってやつかなあゝなんちって…」

こちら満面の笑み。

「おおおい！バスがあるなら乗ろうぜ！」

まったく今までの苦勞が水の泡だ…さつさと乗車して飯にありつこう。

「え、えーと。バス停はさっきの所だけなんだ…」

「ちょ、ま、マジかよ」

「まじだよ」

俺の空腹は限界を迎えそうだった。。。

「腹減らないか^^;」

ちよつとキレイ気味に言う。

「う…ごめーん！忘れてたんだよー！」

「なんてこつたい…」

「ほ、ほら！若いんだから、歩こう！バス代分多く食べれるよ！」

説得力の欠片もなかった…

「もう体力が…あと何分くらいで着くんだよ…？」

「15分くらいかな…」

「この坂を…？あと15分…だと？」

「…うん」

「ちょっと俺のことおんぶしてくれないか、疲れちゃった」

冗談冗談、冗談のつもりだったんだが…

「わ、わかったよー、はいー」

しゃがみ込んで背中を向ける、おいおい…アホかコイツ…

「…」

無視して先を歩く。こうしている時間がもつたいない。

「あ、あれ？ちょっと、なによ！人がせつかく救いの手を差し出してるのにいい！」

「おま、冗談に決まってるだろうが！第一無理に決まってるだろ、よく考えろよな…」

「えー、冗談なのーっ？本気なのかと思った…」

またコイツは…

天然なのか…力馬鹿なのか…どっちかな…

「ほらいくぞー、置いてくぞー」

「もー、まってよー」

この他愛もない会話が俺は充分楽しかった。

そして10分後……

「きたあああああああ！」

「おーやつとついたねー！」

なんでこんな遠い場所にデパートなんだ…しかも20階はあるんじゃないかという高さ。

そんなことより腹が減ったので、真っ先にそのファミレスとやらに、向かうことに。

妙に長いエレベーターに乗り夕日が心地よい屋上に到着した。

例のファミレスは大して混んでいなかったのですんなり入れた。

ウェイトレスに案内されるなり風が心地よく、日当たりのいい席につく。

「よっしゃ、食うぞー！」

どれも美味そうで悩むところ、そして値段も格安！あの某Sより安いぞ！

ファミレス

「じゃあ、私はパスタにしようかな、和風スパゲッティ。蔵原くんは？」

「そうだな、俺はこのお子様セットを3つだ」

「え、なに？なんで？」

「いいか、カロリーと値段を考えるとお子様セット3つが一番安い！」

「……………」

「嘘だ、冗談だよ、H A H A H A」

内心本気だったんだがな、引かれたからしょうがない。

「じゃ、俺はチキンライスとピザで」

「随分食べるね、見た感じチキンライス凄い大盛だよ？」

「せっかくここまで来たんだ、食わないとな、それとピザは二人で分けようぜ」

「え、あつ！二人で？！あ、ああそうだね！」

月代ってこんなキャラじゃなかったはずなんだけどな…理想像が崩壊していく…

まあ弄り甲斐がある奴には間違いない、もうちょっと…

「ああ、二人で一緒に仲良く分けような、はんぶんこ」

『カアアア』

真つ赤だな、これ大丈夫か？こんなの普通に言うだろ…？

「おーい、どつか逝っちまったのかー？」

手を顔の前にかざして何度も振ってみる。反応がない、少々やりすぎたか？

放っておいて注文しよつと…

「すいませーん、注文いいですかー？」

「はい、少々お待ちくださいーい」

「おまたせしました、ご注文をお伺いします」

「チキンライス一つと和風スパゲッティ一つにマルゲリータ、以上で」

「お飲み物はいかが致しましょう？」

「水だけでいいんで、大丈夫です」

「かしこまりました、ごゆっくりどうぞー」

…まだ動かないぞ月代…まったく、世話の焼ける奴だな。
簡単に命を落としかねないぞ…

「おーい、月代さーん」

駄目だ、メインシステムがいかれてしまったようだ、回復するまでスルーしておくか…

「おまたせしましたー」

「はやっ！…！！」

驚きすぎて大声を上げる俺…

「あ、すいません…」

「うふふ…」

くそ、恥ずかしいぜ…

「それでチキンライスの方ー」

「あ、はい俺です」

「和風スパゲッティはこちらですね、それとピザになります、こちら熱いので注意してください」

「わかりましたー」

「じゅっくりどろどろー」

.....

そろそろ起動しようぜ...月代さんよ...

「おーい、気は確かかー？月代ー？」

『ぐりぐり』

ゲンコツぐりぐりをしてやった

「いたたたあたあ、ちょ、やめて！」

「ん...」

思い出してしまった、あいつのことを。

「あれ、どうしたの蔵原くん？」

「い、いやなんでもない、食おうぜ」

「う、うん...」

もう忘れていいのだろうか、俺はあの夢でなにか大事なことを気付かされた気がする、結局あの女性は俺になにを伝えたかったのかは分からなかったが、変わる気がする。

記憶が浅はかではあるが何かが吹っ切れた気がした、でももうあんな思いはしたくないという気持ちがまだ少し強い、もう会うことは

ないかもしれないし、ただの間違いだったのかもしれない、今は忘れてしまおう。

関係ないさ、もう、あれは悪い夢だったんだ。

忘れるためにも俺は食う、食う、食いまくる。

それにしても量が多い…もう水三杯飲み干している。月代もなかなかキツそうな表情を浮かべている。

「これ、マジで四百円…？」

「らしいよ…まあおいしいから問題ないと思うけどね、量以外は…」

「俺のこれ、ご飯三合近くあるだろ…」

「私のも、5束くらい使ってるよ絶対…」

よくもこんな破産価格で販売できるもんだ…もう残すの決定だな。

「くはー食った食った！」

半分以上残して終了！

「おいしかったねー量が異常だったけど」

「まあ…な、これもしかして、残された分を他の客に出してるとかないよな？」

「ええっ！それはさすがにないでしょ！汚い！」

いや、そんな真面目に答えなくても、こんな馬鹿正直に答えられるとちよつとまた弄りたくなってくるな…

「でも月代が残したのだつたら俺は食べてもいいな、寧ろ食べたい…！」

「へええ?! だだ、駄目だよ! 風邪だつたら菌が移っちゃうよー!」

「それでも、一度は月代の中にあつた菌だろ、それで一緒に風邪をひけるなら、俺は…」

「ななっな! なんでそんなこと…!?!」

つぶ、普通ならこんなこと言えないだろうがな、俺は一度こいつに告白をしていて、俺の胸の内を隠す必要なんてないわけだ。それにしても今回はなかなかノックダウンしないな、ラストスパート!

「分かつてるだろ?」

「え、ななにが?!」

「まったく素直じゃないな。俺が月代のこと…」

「っ…」

『プシュウウウ…』

「ちよ、最後のきめ台詞言わせろよっ」

機能停止確認、任務完了！

「おーい、月代さーん？返事してー」

「はは、はははうう」

壊れちまった…こりやどうしようもないな…
含み笑い…

「起きないと、マジで月代の食いかけ食っちまうぜー」

「?!だ、だめえ!」

再起動確認、、っち、惜しかったぜ。

「冗談だ冗談、くくっはははは!」

「もー。相変わらず意地悪なんだからーっ!」

お互い馬鹿な奴だと思った、付き合ったらまさにバカカップルである、
いや、付き合えたらな。

「あ、そうだここの一番の名所を忘れてたよ!ここは景色がいーんだよー」

「おお、食つこと&月代弄りでぜんぜん気付かなかったぜ」

「まったく…ほら、ここから海を眺めると超綺麗なんだよー、夕
日と重なって絶景なんだから!」

なんだかすごい熱心に話している、そんな姿を見ているだけで、生きてて良かったなんて、馬鹿なことを考える。

「それでね！それでねっ！あつちに大きな樹があるでしょ！あの樹は何百…いや多分、何千年も前から生きてるんだってー！それで、あの樹はこの町にしかない新種なんだよ！」

微笑ましいな、本当に。まるで幼い子供のように、あの必死な素振り、可愛すぎる。

「くくっ」

「ねーちよつと聞いてるー？！せっかく人が説明してあげてるのにいつ」

「ああ、聞いてるよ、それであの樹の下はどうなってんだ？」

「ふふ、それがね。あの樹は高いところからじゃないと見えないんだよ！下からだとか神社があつて、その裏にあるから、一般の人は行けないんだー！」

「ふーん、そうだったのかー」

「蔵原くんが倒れていたところもちょうどあそこの付近だったよー、気付かなかったでしょ？！」

あれ？

まさか、そんな。

あそこが…？

忘れたいのに…？忘れたいのか…？

あの夢……

俺にどうしろというのだろうか、やはり拭い切れない現実なのだろうか…

もう関係ない話だろ…！

「ど、どど、どうしたの？！蔵原くん涙でてる？！」

「…っ！え、あ、マジだ、雨でも降ってきたんじゃないかな」

俺って嘘が下手なのかもな、っ…。

「ねえ、どうかしたの…？」

「へへっ、なんでもないって、ただ勝手に流れただけだよ」

「嘘」

ビクツとした、その一言が、とても。とても強い言葉に感じた。

「え…」

まさか彼女からこんなことを言われるとは思ってもいなかった、彼女の眼差しに俺は動揺してしまう。

「嘘だよな？どうして嘘吐くの？そんなに私頼りない？！」

言葉という凶器が俺の心の傷を開いていく、啞然としているだけで俺は何も言えなかった。

確かに嘘は吐いている、でも月代には何も関係のない話であって。

「……」

「ねえ、なんとか言ってよ蔵原くん…！ねえ…」

痛い、胸が痛い。

月代の優しさが痛い。

「やっぱり、あそこで何かあったんだよね？」

凶星だ、でも関係ないし、もう忘れない……。

「なんもないって、なんで今更その話が出てくるんだよ」

毛を逆撫でされているような気分になる、せつかく忘れようと思っていたのに、また思い出してしまう。

「嘘だってだからっ！」

手をギュッと握り締めながら、叫ぶ、周囲の客もこちらに注目してしまっている、ちょっと迷惑になるかもしれない。

「だから…どうしてそう思うんだよ！？」

「靴…」

「え…」

「どうして靴履いてなかったの…？普通あんなところで裸足なんて、

ありえないよね？」

失態だった、ここで痛いところをつかれた…

もう嘘を隠し通すことは難しいだろう、ああそうか。

家を出るときにあいつはもう…俺の靴がないことで、嘘だって気付いてたのか…だからあんな態度で、寂しそうに…

馬鹿だ、俺はマジで馬鹿だ。月代の気持ち、なにも分かってやれないで…でも…

これは本当に関係のない話、言ったところで何も変わらない、俺の中で消化されるのを待てばいいんだ。

「ごめん…これは誰にも関係のない話だから」

「…どうしてよ…ぐ…うつ…」

泣き出した、どうして…

どうしてそこまで…俺を心配するんだ？

「蔵原くん、えぐっ私のこと信用してくれないの？ひっくっ…」

「ごめん」

そう言うしかなかった。

「誰にも言えないことなの…?」

涙声で聞き取りづらい、とてもとても、長い時間に感じられた。

「言えない、というか言う必要もない」

「そう、だよね……私なんかじゃ頼りにならないよね…」

そうじゃないんだ、月代のことはとても信頼しているし、嘘を吐ける相手だともう思っていない、これを言っても、月代がなにかできるわけじゃない、これは逆に月代が無力だということを決定付けてしまうことになる、そうしたら余計に月代は落ち込んでしまうだろう。

「俺だって、なにも考えてない訳じゃないんだよ…そもそもなんでそんなに俺に突っかかるんだ…?」

「なんでって…ただ心配だから、放っておけないから…」

「俺なら大丈夫だって、月代は誰にでもちよつと優しすぎるよ、もつと自分にも気を使ってやれよ」

「違つつ、違うのっ！そうじゃないんだってばっ」

必死に首を横に振って否定をアピールしている、幼い子供が嘆いているように見える、何かにすがりつくように、駄々を捏ねている。

「なにが違っんだよ、俺だって月代のこと心配してるんだって」

「好きなのっ！」

「だからなにが好きな……なんだって？」

言っている意味が分からない、初めてだからだ、人の口からそのような単語が発せられているところを。

今月代はなんていったのだろうか、好きと言ったと思ったのだが、気のせいだろうか、いや気のせいじゃない、じゃあなにが好きなんだ？

「蔵原くんが、好きなのっ！好きだから放っておけないのっ！好きだから心配するのっ！好きだから一緒に居るのっ！好きだから……！」

やはりそうなのだろう、月代は俺が好きなんだと、頭では分かっている、どうも理解できない俺がいた、一度振られたのに、ということが引っかかっているのだ。

「な、え、好きって何で…、それともうちちょっと静かにしよう、な？」

彼女をなだめるように肩を軽く叩く、なんだろう、嬉しいんだけど、なにか違う…

「ぐすつ、う”ん”ん」

「だ、だってさ、一回俺振られてるんだぜ？それなのにどうして？」

「わからないよー…うー」

「う、うーん…」

参ったな、頭をボリボリと搔く、こついつときって何て言ったらいいんだろうか。

「蔵原くん…あのね」

彼女が口を開く、涙を流しながらそつと俺を見る。

「な、なに…?」

気を取り直したように、姿勢を整える。

「私を、あなたの恋人にしてくれませんか？」

それは遅いようで速い告白だった。

2話 矛盾と決意（後書き）

これからちょっとつまらない話が続くかもしれませんが、
気にしないでください。

3話 始まりの昨日（前書き）

0話と謳ってもいい場面です。ちょいちょい残酷？でもないかな、そんなシーンあり。

3話 始まりの昨日

さかきはら ひより
榊原鶯璃は夢を見ていた、良い夢なのか悪い夢なのかとても判断で
きるものではない夢。

両親は私がまだ幼い頃に他界してしまった、もちろん声や顔、背格
好など、なにもかも記憶にはなかった、それも今の私にとっては良
いことなのか悪いことなのか解らない。それでも苦とも楽ともとら
えず、近いようで遠いような、歯切れの悪いハサミをいつまでも使
い続けている様だった。

しかしそこには居るのだ、居てしまったのだ、母と父が、記憶に残
っていない二人の面影が……
私のことを笑顔で呼びかけている。

「鶯璃、おいでおいで」

それが私の意志で作りに出した偶像であろうと、私を酷遇する者であ
ろうと、その手のひらと手を重ねたかった。
必死だった、その言葉に応えるべく、全身全霊を賭けて身体を動か
した、でも一向に私との距離は縮まらない。

「ほらっ頑張っ」

遠く近い声はすぐそこに聞こえている、でも手を伸ばしても、伸ば

しても。

進んでも、進んでも、遠ざかってゆく。

でも、休むことなく手足と動かせば、その距離も変わることなく保てる。

「おかあさん、おとうさん、待って…」

笑顔だった、幸せそうだった、この世界には私と母と父の三人だけ。誰にも邪魔はさせない、だってこれは私の夢なんだから……

「…待って…」

手足がだんだん重くなっていく、鉛を付けているように一歩一歩が重い。

「ほーら、あと少しっ」

離れていく、どんどん小さくなっていく、諦めない、絶対に追いついてみせるんだ。絶対に。

「はっはっは、はあっはっ!」

それでも手足はどんどん重くなって、とうとう動かなくなって……

「おかあさん！おとうさん！」

もう、駄目だ。追いつけないんだ、悔しい、悲しい、情けない。

そんな言葉しか頭に浮かばなかった。

雨が降る、私の心に…涙となって……

「もう、しょうがないなー」

…来た、母と父がこちらへ歩いてくる。よかった、私の言葉届いたんだね。

嬉しさのあまり、羞恥心を持たずに声を出して泣く、大声で。

この世界に私の声が響き渡った、私って情けない声で鳴くんだな、私は自分を嘲笑った、笑顔を涙を顔一面にこぼしながら。

「あらあら、泣き虫さんなのねー」

「僕に似たのかな？なんてね」

「そうかもね、ふふっ」

「相変わらず酷いな、はは」

そんなやり取りと聞いているだけで、私の心は愛で満たされていく。
ああ家族って良いものですね。

「ほーら、だっこしてあげましょうねー」

温かな細い手が私に差し伸べられる、私もその手に手を伸ばす。そしてその手を。

重ねることはできなかった。

なんで...? どうして...? 私の夢なのに...? 夢...? 悪夢...?

私の。

私の夢を、邪魔する者が居た……

迫りくる黒い影、何人も何人も、赤い目をした奴らが後ろからゾロゾロ近づいてくる。

「おかあさん、おとうさん、後ろ！危ないよ！逃げてええ！」

届かない…声が出ない、どうして？
だってこれは私の夢じゃない！なんで邪魔するの？！

「鶯璃、帰ろうか」

黒の背景を背に、父は変わらぬ笑顔で手を伸ばした、力を振り絞ってその手に手をかけた、届いた……刹那。

『ドスッ』

何かが倒れる雑音と握り締めている父の手が軽くなった、理解できない、そんなまさか……

私の手には確かに父の手が……

え……手……？

これは…なに…？

滴り落ちるこの生温かい液体は何……？

理解できない、それでも理解できた、それでも理解できない
。

「い、いや…、いっいやあああああ！…！」

叫んだ、嘆いた、私は父の手を、腕を握っていた、怖い、気持ち悪い、いらない！！

「あ”あ”ああ”ああ”ああ！！！！」

振り放そうと必死に父の手を上下に振った、切断された面からドクドクと溢れ出す血が雨の様に降り注ぎ、私を染めていった。

それでも切断されたその手は私の手をがっちり握っていて離れなかった、怖い……。

「う”ぐ”おげええああ”ああげほ”がふ”げぐ”！」

嘔吐した、気持ち悪い、嫌、嫌、嫌！！！！

「もう嫌ああ！こんな世界を私は望んでなんかいない！もうやめ

てえええ！」

私の声は届かない、この黒い影達の矛先は母へ向けられた、そんな
…なんで…なんで笑ってるの…？

「お、おかあさあ”ん！逃げてよおおお！」

その言葉に反して、母はこちらに近づいて来たのだった。

「だめ！来ないで！来ないで、来ないで！来ないでこないでコナイ
デこないで…こないでってば…」

もうダメだ、疲労がたまり声が出せなくなってきた、泣きじゃくる
ことしかできなかった、嘆くことしかできなかった、見てることし
かできなかった、なにもできなかった。
そしてとうとう黒い影は母を取り囲んだ。

「やめ、やめて！やめてください！おねがい！おねがいだから！おねがいですから！どうか…！どうか…やめてください……」

私の精神はもう限界だった、希望も持たない瞳で私はそれを見る
ことしかできなかった、力が抜けていった、目を開いていることも
困難だった、そしてまた。

『グシャアッ』

壊れてしまった、何もかも……。

………

「はっ？！」

そこはもう夢ではなく、現実の世界だった、朝日が眩しい。

「……うぐつ、ぐす……」

気付けば全身汗だくだった、頬も涙で濡れている。その所為かとても寒かった、そしてドツと疲れてしまった、夢を覚えているなんて何て酷なのだろうか…。

あの赤い世界を私は忘れられないだろう、まだ気持ち悪い。

今日は10月24日、土日は結婚式など奉納があるので忙しい。今日は水曜日なので通常業務ということになる。

巫女の仕事はいたって普通で、一日は掃除から始まる。それから、役割分担で指定の業務を遂行する…でも。

私は巫女の仕事が好きではなかった、なぜなら私は子供の頃から巫女修行に励み、16歳の若さにしてベテランである。

唄から楽器までなんでも巧みにこなしてきた、しかし、最近ではその毎日同じ仕事に飽き飽きしている。

私は榊原神社の一人娘、ただそれだけの理由で他の巫女や神主は私を様付けしたり崇める。

ぜんぜん良い気持ちにはならない、それにここには仲良く話せる友達もいない、私は一人なのだ。

それでもきちんと御給金は貰っているから、嫌とも言えず繰り返される日々を送っている。

『パシッパシッ』

「いったーい…」

自分の顔を叩き気合を入れる、今日もつまらない一日のスタートだ。とりあえず、お風呂で汗を流すことにした、掃除はアルバイトやそれなりのベテランが集まってからだ。

脱衣所に入って早々、服が汗で引っ付いて脱ぎづらい、気持ち悪い。洗濯機に投げ入れる。

ここのお風呂は一人では広すぎる程の浴室であつた、無駄に金を使っている気がしてしょうがない。

時間をかけて長髪を洗い流し、身体も念入りに洗う。

巫女にとっては清潔感も大事にしなければならないのだ、巫女とは地味そうだけど、大変な仕事なのだ。

長髪をヘアピンでまとめ、ようやく湯船に浸かる事ができる。

「つふううあああ…」

気持ちいい…

「おやじ臭い？いいんです、誰も見ていませんから」

なんて独り言をかます、独り言って楽しいものだ、客観視して話す

ことができるから違う自分が現れる。

「……」

まあどこの人でも同じ感じなんだろう、湯船に浸かると換気扇の音だけになる。

ふと、あの夢を思い出す、妙にリアルだったので気持ち悪いくらいだった、できるだけ思い出さないように努力するとしよう、でも忘れるなんて無理な話だった。

今まで両親のことはあまり気にもかけていなかったけど今回のことのせいで少し気になりだしていた、死んだってのは知ってるけどなんで死んだのかまでは聞いていない、あとで両親のことをよく知っている神主に聞いてみよう、きっと事故が何かだろう。

母も父も同じ日に死んだと聞いている。ちょっと詳細が知りたいだけだった。

「…あの夢は……ううんダメダメ、思い出しちゃダメです、ポジティブですよポジティブ……!」

湯船からあがり、脱衣所に戻る。そこまではよかった、でも。。

「あ……」

脱衣籠に手を伸ばす手が止まる。

「服が……ない?! あれ、どうして?!」

簡単である、忘れたただけだったのだ。

「う”う…寒い…」

タオル一枚ではさすがに寒かった、自分の部屋まで歩いて3分、無駄に広い神社の施設が裏目に出た。

「あ、そうだ、さっき脱いだ服がまだ…ちょっとくらい汗付いてても大丈夫ですよね」

しかし、異質な機械音が聞こえるではないか。。

「あ、あれえ…スイッチ入れましたっけ…」

動いている、中身は服一枚…

「こ、これぞ全自動洗濯機！蓋を閉めれば洗濯開始！なんと超特価2万円！」

馬鹿正直に独り言、虚しさが募るばかりだ。

「もー！走るっきゃないですね！ゴーゴゴー！」

扉を開けて全力で走る…！

と、人影が…！！

「おや、おはようございます鴨璃様」

ここの神主のおじいちゃんだった、よかった。

「お、おはようございます！今日もいい天気ですね、で、では！」

「ほっほ、がんばれがんばれ若者よ、ほっほっほ」

馬鹿にされてる気分だった…

「ぜえぜえ…はあはあ…」

自分の部屋に着いた頃にはもう寒くはなかった、寧ろ暑い…

少し休んで巫女服に着替える、鏡を見て身だしなみチェック。そろそろ朝礼の時間だ。

「よし、今日も一日頑張りましょう私」

朝礼は実に退屈だった、いつもと変わらないおじいちゃんの挨拶で始まり挨拶で終わる。

今日の仕事は書物整理という裏方の仕事だった、簡単で嬉しい限りである。

書物があるのは地下室。と、言っても暗いわけでも怖いわけでもない。

ちゃんと電気もあり、空気清浄も完備していて、冷暖房まで付いている。

「やっぱり、お金の無駄…」

今まで何回このセリフを言ってきただろう…それほどまでにこの神社はどこか変だった。

なぜこんなに金回りがいいのか…まったく疑問である。

「給料上げてくれればいいのに…うう…」

そんな無駄なことを言いながら作業を進めていく。

この神社の書物は、現代の文字…なのだろうけど昔の人は独特な文字なのでさっぱり読めない。
読めればきつとこの神社の歴史が色々と分かるのだろう。興味はない。

それにしても、この書物全部整理するのに私一人だけという悲惨な状況。

「よつこらせつと…ふう…」

これまでに多人数で仕事をしたことはほとんどない、いつも一人でやらされている、他の人達は多人数なのに、なんで…

「ごどくですーさみしいですーひどいですー」

まあ、いつものことなのだ。私は、この神社の人達から避けられている…

ここに住んでいる人達はみんな私を蔑む目で見るのだ、悪いことをした訳でもないのに。

唯一まともに会話をしてくれる人は今朝会ったおじいちゃんと、この一番偉い人だけ。

これって虐め？なんて思ったりしてたけどもう慣れてしまった、『私は普通じゃないんだ』なんて適当に言い聞かせて毎日過ごしている。

こんなことをいつも考えながら仕事してる私って…惨めですね、ふふ。

………

昼休みになったので、両親について一番偉い神主さんからお話を聞きにいった。

『トントン』

「鶉璃です、少し御時間よろしいでしょうか？」

「ああ、構わないようしたね？」

了承を得て扉を開ける、そこは、普通の庶民的な部屋でハゲのおじさんがタバコを吸っていた。

「失礼します、あの、私の両親のことなんですが。両親の死の原因はいつたい何だったんでしょうか？」

神主（富山元禄とやまげんろく）さんは突然表情を変え、冷たく怖い目つきでこちらを見てきた。

（あれ…なんか怒らせてしまったかな…？いつも優しい元禄さんな

のに、こんな顔初めて…)

と、思いきやいつもの表情に戻り。

「ああ、事故だよ交通事故。まだ若かったのに残念だったね」

予想通りの返答だった、でも何か引かかった、今の顔…これは女の感だが、嘘だろう。

いや、女の感以前に今の表情はおかしすぎる。知りたい、両親のことを、そんな気持ちでいっぱいだった。

「嘘…ですよね？隠さなくてもいいです、ちゃんと受け止めますから、教えてください」

思い切ってやんわりと問いました。

…やはり表情が変わった、それもはつきりところから見ている。妙な威圧がかかる、恐怖さえ感じた。

「嘘じゃないよ…」

「嘘です、じゃあ、いつ、どこで、どのように死んだんですか？」

つい、興奮してしまって、一方的に言葉を投げつけてしまった。

「……」

やっぱりそうだ、答えられないではないか。嘘だった。

「すみません、つい興奮してしまって。教えてください、両親のこ

と……」

頭を下げる、ようやく口を開いた元禄さんはこう言った。

「今はまだ話せない、すまんね、ちょっと出て行ってくれないか、一人にしてくれ」

「……っ、わかりました、また改めて伺います、失礼しました」

わからなかった、でもひとまずはこれでよかった。なぜなら両親は事故ではないという事柄に確証が掴めたからだ、家族に一步近づいた気がした。

………

午後二十時。

ようやく仕事が終わる時間になった、アルバイトや他の人達も帰って行く。

夕食ができるまでの部屋で一息つく事にした。

この神社の施設には10人程の人が住んでいる、私を加え、元禄さん、朝すれ違ったおじいちゃん、他に7名。

まだまだ部屋は沢山残ってるのに、なんで10人しかいないのか疑問だった。元禄さんが許さないらしい……

そんなことを考えてるうちに睡魔が襲ってきた、朝起きたの少し早めだった所為かもしれない。

私はそのまま私は眠りついてしまった。

……

「ん…もう朝かな…」

目覚めてしまった、正直なところまた夢が見れないかと期待していたが、まったく見れなかった。

まだ寝たりない気もする。それもそうだ、まだ朝日すら立ち込めていない。

「あれ…まだ零時前じゃないですか、それにしても目が冴えてるなあ…」

夕食が目の前に置いてある、寝起きなので食べる気にもならない。

「んん…寝よう…」

再び布団に潜り込む。

…

…

…

「むうああーねむれない」

散歩でもすることにした…

暗がりの神社はなかなか怖い。けどもう何十年も住んでいるからどうってことはなかった。

……裏庭まで歩いた、結構長い道のりだった。

ここには代々伝わるという樹がある、この町の名所でもあった。とても大きく、何千年以上ここに根を張っているという、驚きだ。

木肌にそつと、やさしく触れる。

なぜだろう、この樹に触れるとどこか懐かしい気がする。そして暖かい……

木目にそつて撫でてみる。

ずっとこうして触れていたくなる、ああ、なんだろうこの気持ち……

5分ほど樹に触れていて、気が落ち着いた。

「…そろそろ戻りましょう、冷えてきたし」

表の庭に戻る。ここには大きな鳥居が沢山建てられている。これも無駄に金をかけているとしか思えない。

中に入ろうとすると、神社の入り口の石階段の方から声が聞こえてきた。

「……るな……」

遠くてよく聞こえない、私はその声の方に引っぱられるかのように歩いていった。

『コンッ』

何か缶を置くような音が聞こえた。

そこには暗くてよく見えないが男性が一人座っているではないか、怪しい……怪しすぎる……

「ん……ゴクリ……」

恐る恐る近づく。。。

「なあ俺、なんで俺は親父と一緒に暮らすって決めたんだ？」

え？誰に言っているの？？

「金だろ、何にせよ最後にものを言うのは金だよ、マネーさ」

どうやら独り言らしい、この人は金がすべてと思っているらしい。

「そのわりには不機嫌そうじゃないか、どうしてだ？」

……この3つのセリフで分かることは、金のために父親と一緒に住んでいる、でもあまり愉快ではない。

そついうことなんだろう、私は悔しかった。

この人には親と呼べる存在がいる…それだけ悔しかった……

私には……

それなのに、家族と一緒に暮らしているのに、それだけでも幸せなのに…

どうして不機嫌と言えようか…

この人は親の優しさに気付いていない、可愛いそうな子だと思った。
。。

「さあな、どうしてだろうな」

ほらね、分かってない、私が教えてあげよう…家族がいらないからこそ分かる…それが……

4話 一歩踏み出して（前書き）

忙しくて更新できない……がんばれ俺……

4話 一歩踏み出して

俺は、ベッドに大の字になって寝転がっていた。

何も考えることなく、ただただ時計が刻むを音を聞いていた。

こうしていると落ち着く、今この瞬間をなにもせずにごす事を心から、幸せだ、平和だと思う。

「……」

今は二十時半、腹はまったく減らない、あれだけ食ったからな。

今日はひとまずこのまま寝るとしようか。

そんな時、俺の安らぎの一時を邪魔する奴がいた。

『ピ。□□□□□□□』

電話だ、そいや夕方頃に一回電話あったっけな。

『ピ。□□□□□□□』

「ああ、うつせーな」

『ピ。□□□□□□□』

「今は出る気分じゃない、残念だったな」

『ピロロロロロロロ』

「……」

『ピロロロロロロロ』

「いい加減諦めろよ……」

『ピロロロロロロロ』

「あーもうわーったわーった、はいはいはい」

『ピロロガチャッ』

「はいもしもしい?」

低い声で応える。

「なんだよそのふて腐れた声は、情けねえ」

「なんだてめえか」

「て、てめっ…ってなんだよ、折角暇な俺が電話してやってんのによぉ」

「お前が暇なだけだろ、俺は今寝ようと思ってたんだ、じゃな」

『ガチャッ』

ためらうことなく電話を切る。

『ピロロロロロロ』

またしても不快な電子音が響き渡る。

「はぁ…家じゃなくて携帯にかけてこいよな…」

『ガチャッ』

「で、なんか用か？」

ため息混じりに額を左手で支えて応えた、どうせあいつが電話してくるときは遊びの時だけである、そんなに俺が暇に見えるのか……

まあ否定はできないが……

「おお、これから寝るなんてお前人生の半分無駄にしてるぜ、もっと遊ばうぜ」

案の定、遊びの誘いだつた、遊び以外になにかないものと……

「なんだ、説教の電話かよ、俺はこの前まで絶対安静の身体だったんだぞ」

「おいおい、またなんかやらかしたのかよ、相変わらずだなあ、かつかつか」

「いや別に大したことはしてないけど、ってか『また』って何だよ俺はいたって普通の善良人だ」

「まあ別に蔵原が何しようとか俺には関係ねえからな。そんなことよりこれからゲーセンでも行かねーか？」

こうやって俺に何があつたのかとか聞いてこないところが俺には気が楽でならない。無神経と言ってもいいがな……

「ゲーセンかよ…、ん…まあいいか」

あんまり乗り気ではなかったが良い気晴らしになると思った。

平常心にできるだけ近い状態になりたかった、身近な人間は案外安心できるもんだ、こいつで安心できるというのも酷な話ではあるんだがしょうがない。

「んじゃ、いつものゲーセンで待ってるぜ、じゃな」

「おつよ」

『ガチャッ』

- - - - -

当然俺にだつて友達くらい居る、今の電話の相手は進藤明人、しんどう あきと中学3年の時に転校してきて一緒のクラスになったんだ。

昔は随分な小心者だった、まあなんというか中学時代、進藤がクラス全体で虐められてる感じでさ。女子も男子も近寄らない、毎日が「うわゝきもーい」「うぜえんだよ」とか暴力的な言葉しかあいつは浴びていなかった。

学校では典型的な虐めのパターンだ、終いには先生までも妙につつかかってたりするから酷い。

そこで虐めが大嫌いな俺は見かねてそいつを励ましたり、友達にでもなつてやろうと思って放課後の帰り際に声をかけるつもりだった。当然一対一で話をするつもりだ、誰かに見られたら俺も虐めの対象になりかねないからな、まあこの考え事態酷いことだとは思っている、ただの保険さ…

放課後の教室内ではやはりいつものように男子から筆箱を隠されたり、上履きを投げられたりと大変そうである、あいつはいつもその所為で帰りが遅くなる、それが終わるまで教室の隅っこで眺めてることした。

「酷い…最低…」

俺の横にならんでその状況を見ている女子がいた、当然このクラスにも俺と同じ考えの奴はいる。

それは月代千代美だった。

「そうだな、でも助けようと思って巻き込まれるだけだ」

「うん、他人事…私は無力なんだよね…」

月代は本当に優しいやつだ、他人のことを考えてるやつなんかこのクラスでは月代くらいだ。

「そういう訳でもないさ」

「え？」

少しでもいい、なにかの希望を俺に期待しているような瞳で俺を見つめる。

「月代、俺と一緒に進藤の友達にでもならないか？」

「え…でも、その…」

とても申し訳なさそうな顔をしている、言いたいことは分かっている、虐めの対象になってしまおうと言いたいんだろう。

「大丈夫、巻き込まれたりはしないよ」

やはり凶星ではあるようだ、それでも月代は疑心暗鬼な表情を浮か

べている。

「学校外だけで友達になってやればいいんだよ、でもそんなの本当の友達なのかって聞かれると確かに違つかもしれないし、進藤にも失礼だとは思う」

「うん」

ゆっくりと相槌をうつ。

「でもさ、中学なんて卒業しちまえばみんなバラバラになるだろ、それからが本当の友達になれるってことだ今俺達は3年の半ばだ、卒業なんてすぐだろ」

「それじゃあ、学校では卒業まで公私混同するなってこと……？」

友達でありながらも学校では一切の関係を絶つ、それがどんなにやるせない気持ちなのかは痛いほど分かる、進藤だってそんなことされてたらどう思つか考えたくもない。

「辛いとは思う、けど必要悪と考えるしかないんだ」

「でも、本当にそれでいいのかな？これからも卒業するまであんな虐めが続くかもしれないんだよ？進藤君がそれに耐えられると思うの？」

「ふむ……引き籠もりになるってか……？」

「そう…」

確かにあのまま虐めが続けば精神的にも肉体的にも気が滅入るかもしれない、でもそれはそれで話せるチャンスかも…いや、こんなことは考えちゃいけない、人ひとりを救い出すにはそれなりのリスクを負うことになる。

ノースクハイリターンという訳にはやはりいかないか……。

「とりあえず放課後、俺は進藤と話してみるけど、月代はどうする？」

まあコイツはすぐ顔に出るタイプだから来ても何もできずにおろしてるだけだろうな、俺一人で行こう。

「行く」

「マジすか」

自分のこと何も分かってないんだな…遠まわしに足手まといと言いたいんだが。

「マジっす」

握られた拳が本気なのだと、そう思った。

「うんまあ、じゃあ待ってようぜ」

「う、うん」

……

遠くから見てて無残だった、というか虐めてる奴も早く帰れっただ。

「っ……」

月代が見るに耐えないらしく後ろを向く。

もう虐めはパターンに入っていた、上履きを脱がされては投げられて、取りにいつてはバッグが荒されて、阻止に向かえば机が倒されて……

「最低なやつらだな……」

ああやって浮かれてる奴らを見るとぶっ飛ばしてやりたくなる、拳を握り締めてグッと耐える。

「まだ、終わらないの……?」

「まだみたいだ」

「虐めをしてる子達っていったい何考えてるんだろ……」

月代は高く小さなつぶれた声で机にうつ伏せになって呟いた。

「日頃のストレスをぶつけたりだろ、兎に角気に食わないことが少しでもあると何かに当たりたくなる、つまり短気なんだろうな」

「ん……蔵原君も虐めつてしたことある…？」

なんと失礼な、俺は集団で虐めるなど酷いことはしたことない、寧ろ逆の立場だ。

まあでも……

「集団ではないけど、昔は俺も短気でな気に食わないとすぐに人を殴ったり蹴ったりして病院送りの重症を負わせたことはあった、あの頃は人の命なんてなんとも思っていなかったからな」

人の明るい将来だつて奪ったこともあった……。

「そうなんだ…酷いね」

ちよつとグサツときたな、まあ否定は一切できないけどな。

「そう、俺は今進藤を虐めているあの最低な奴等と同じなんだよ」

「でも……今は違うよね？」

「ん…さあ、どうだろうな、このまま月代を攫つて犯すかもしれないな」

いぜ？」

鼻で笑って冗談を咬ます。

「しないよ、そんなこと絶対に」

「ほう？」

意外な回答だった、俺の過去を知りもしないでよく言えたもんだな。

「だって今は虐められてる進藤君を、どうにか助けようとしてる。そんな人がに悪人な訳ないもん、絶対」

正直嬉しかった、俺の過去を受け止めてくれているようで……

「……………そうか」

「今は今、昔は昔、でしょ。私が出会った蔵原君は優しい蔵原君だよ。だから」

……………

『変わらないでね』

まったく、なんでコイツはこんなに口上手なんだか、感動しちまつたぜ。

「ああ、変わらねえよ、これからもずっと、永遠にな」

「うん、神に誓ってね」

「神に誓うよ」

「えへへっ」

おいおい、なんでこっちが浮かれムードになってんだ、今必死こいてる進藤に悪いじゃないか。

「話がすっげー脱線してるんだけど、どう思うよ、月代さん」

「あ…ごめん」

「まあいいけど、もうあいつら帰ったみたいだぞ」

気付けば教室の隅でバッグや筆箱の中身を床に這いつくばって集めている進藤の姿が見受けられた。

「手伝おうぜ」

「そうだね」

無残に散らばった教科書や鉛筆やらを拾う、その様子に進藤も気付いているようだ。

「ほらよ」

「あ、どうも…」

同級生に対して敬語とは…全員が敵にしか見えんのかこいつは。

「はい、進藤君」

「どうも…」

「ふむ…せめてそこはありがとうなんじゃないのか？」

思ったことをつい口にだしてしまった。

「あ…ご、ごめんなさい。ありがとうございます」

月代の冷ややかな視線が俺に向けられる、怖い怖い…

……

無言である……

俺達も何も言うことはできなかった。

「じゃあ、ありがとうございました」

バッグを背負って早々に帰ろうとする。

「あ、待って!」

最初に口を開いたのは月代だった。

「はい?」

「あ、あの、その、大丈夫?」

「大丈夫です」

「そう、良かった」

「はい、お気遣いどうもです。では」

なんて愛想のない…お互い様だけどな…

「ああ、あのそうじゃなくて」

「まだなにか?」

「あう…う…」

そーっと俺に顔を向ける、助けでも求めているんだろ?…しょうがない…

「なあ、進藤、俺達同じクラスの蔵原、んでこっちは月代、知っているだろ?」

「はい、お名前くらいは」

「ああ、その前にお前敬語やめろ、気持ちわりいから」

「蔵原君、なに言ってるの…失礼でしょっ!」

「いいよ、敬語はやめる、それで何か様?」

ほう、普通に喋れるじゃないか、上等上等。

「単刀直入に言う、俺達と友達にならないか?」

.....

- - - - -

いかんいかん、いつの間にか過去を振り返ってしまったじゃないか。
とりあえずゲーセン行くか。

靴を履く

ドアに鍵をかける

エントランスでちらっとポストを確かめる

何もなかったのでエントランスを出る

歩く

もう冬だな、大分寒くなってきた、白い息も出るくらいだ。

車の排気ガスが臭くてたまらない。

暗がりの街に仄かに見える電灯や家の光、街が描く光の絵画の中に揺られながら俺はふらふらと歩く。

今自分の中で抱え込んでいる問題は、客観視すれば大したことではない、勝手に俺が事を荒立てて大きくしてるだけに過ぎない。

時間が経つにつれて最初と考えがどんどん変わっていく、まったく自分勝手生き物だ。

やはり姿形は変わることはないけれど、考えはどんどん変わっていく…

「ッフ、神に誓ったって言うのにな」

そう笑い捨てる。

ゲーセンまではすぐだった、ゲームができることは嬉しいがタバコ

臭いのがなんともな……

中で進藤がアーケードゲームをしているのが見える。

実にこっけいな風景だ、画面に合わせて身体が動いてやがる。

「よう、待たせた」

「おおう、今4面まで来てんだぜ、すげえだろ」

「じゃあそこに積み重なってる100円の山はなんだ？」

「ああ、これはコンテニュー用だ、もう6回はコンテニューしてる」

「おま……」

正直4面まではコンテニューなしでいけると思っただが……

「アッー死んだ！くそ、もう一回」

「いやいや、金の無駄だからもうやめろって」

「……やっぱりそう思うか？」

「ああ」

「だよなー」

俺はゲーセンに来てもとくに何もしない、金があるときしかやる気が起きないわけだ。

「あーあ、そうだ俺朝からずっとゲーセンに居てさ、まだ何も食ってないんだよ」

「お前はアフォか、死ぬぞ」

「あっはっは、いいんだよ俺は頭が冴えてますから！」

「うっせえ、ガリベンが」

「ガリベンじゃないですから！！！」

こいつは一応名門校の高校に通っている、まったく悔しいぜ。

「まあどうでもいいけど俺は腹がいっぱいなんだ、寧ろ吐きたいくらいだ…」

「なんだなんだ？そんな不味いもん食ったのか？」

「いや、違うんだ…あの って最近できたファミレスあるだろ、あそこで食ったんだ」

「うお、マジか、あその料理は残し物を使いまわしてるらしいからやめといた方がいいぜ」

………なんということだ…

「マジかよ…」

「それにしてもファミレスなんて珍しいな、いつもコンビニパン食

ってるのに」

「ああ、それがさ月代に誘われて行っただよ」

「月代？何？二人とも付き合ってるの？」

「いや？ああでも今日告白されたな」

……

「ちょ！マジかよ！え、おまつ！なんでええ！」

「いやあ、俺にも良くわからないが感情的になってつい言ってしまったみたいだな」

「え、じゃあ両思いでゴールインですか？！」

「いつ俺が月代のことが好きって言ったよ？」

……

そう、俺は月代に突然の告白をされて、正直驚いた。
もちろん俺も月代のことは好きだ。

いや

好きだった、かな。

あの時、あいつは俺が月代のことを好きだと知っていた、だから今

告白すれば当然付き合える、なんて甘い考えはしていなかった、ちゃんと俺と向き合って、真剣に告白してくれたのだろう。

当然俺も付き合いたいと思っていた、昨日まではな。

『どうしてそこまで俺のことを？』

『自分自身で分かるでしょ、進藤君を助けた日のことを思い出して欲しいの…』

俺は月代の優しさに心を動かされた、他人のことをここまで考えられるこの優しさが…

『昔は、あんなに人のために必死だったのに、なんで今は人との関わりを断とうとするの…？』

『私は、あの時から変わってないよ、けど彼方は変わってしまったのかもしれない』

『思い出して、昔の自分を…』

俺は今までが変わった、分かっていた。いつの間にか俺は人と関わる事を自然と拒絶してきた、それを今誰かに言われたことで再認識することができた。

なんというか、図星すぎて腹が立ってきてしまったんだ、悔しくてどうしようもなかった。

だから今、月代の瞳に映っている俺はとても惨めなものだろう。

そんなことがあってたまるもんか、なんでもいい、足掻くんだ。

このままじゃいつまで経ってもこのへんなモヤモヤは取れないままだ、見返してやるんだよ。

月代に、今の俺を変えてやるさ、お前の思ったとおりにはならないぜ……！

そんな葛藤を繰り返した後、出した決断が。

もう一度鶉璃に会って事情を聞こう、それがフェアってもんだ。

だから俺は……

『ありがとっ、月代のおかげで目が覚めた、今抱えている問題とちやんと向き合ってみる、それが俺にとって満足のいく答えにたどり着いたら……また…俺から告白させてくれないか…？』

そう答えた

月代はとても優しい表情だった、とても穏やかで…

『はい、待ってます』

その微笑は決して忘れない。

………

「いや、断ったよ」

「ええええ！なんで？！どうして？！」

「まあ色々あってな、その内話すよ」

「んー、分からん…分からんぞ…分からんが。蔵原がそういうなら
しゃあないな」

「だろ、んじゃ飯食いにいくか、俺は水だけだけど」

「OK、そのファミレスでいいな、行こうぜ!」

「ういいうい」

その少年は、この先、過酷な試練が待ち受けていることをまだ知らない。

しかしそれは乗り越えなければならない

そう…

いくら血の滲むような未来が待っていようとも……

5話 貴方との距離（前書き）

もう修正しなくていいや（笑）

5話 貴方との距離

その日はあっさりと幕を閉じた、何かが吹っ切れたようで、とても心地よくて、新鮮で。

俺は一人では物事を抱え込めないのかもしれない、誰かに頼って、頼って、頼られて…？

今日も一日をやり過ごした。

そして夜の街並みが、今日という一日の終わりが近づいていることを告げる。

「じゃあまたな蔵原っ！生きてたら会おう！」

「え、じゃあ次はないのか、さようなら」

「おまつ、ひでえ…」

「へっ、またな進藤」

『さようなら』

これは再会を意味する言葉でもある。

ほら、学校で『さようなら』は絶対に言っただろ？

また会おう、無事でいろよ。

なんて気持ちが進められていると俺は思う。

だからってそう易々と使っていい言葉だとは思わない。

決して悪い言葉じゃない、それは分かってる、でもな。

その言葉がいかに皮肉で残酷なものか。

兎にも角にも、俺は明日、もう一度あの場所に。

榊原鶴璃に会いに行く。

誰が見たってあれは、確実な虐待だ、いくら他人でも見過ごす訳にはいかない。

それに。

知り合ってしまったからには、放って置けねえよ。

誰かの為に何かをしようとするのって。

「ふ、悪くないな……」

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

それはただの正義感？

「俺に正義を語る資格なんてないさ」

ただの自己満足？

「…あいつにも満足してもらえないか…？」

本当にあの子の為？

「だってあの子は笑っていたし、泣いていた」

本当は自分の為？

「一番可愛くて大切なのは誰しも自分だろう？」

あの子が笑えるようになったらあなたはどつするの？

「どつするって、そのままだろう？」

あの子が泣き続けるようになってしまったらあなたはどつするの？

「俺を誰だと思ってる？」

もしあの子があなたを拒絶したらどつするの？

「あの子が悲しむ環境を壊すかな」

もしあの子が、榊原鶯璃が。

泣くことも笑うこともできなくなったらどつするの？

- - - - -

我が家に帰ってきた。

『ガチャ』

「あれ？鍵開いてるな…」

どういうことだ、今日は親父帰ってこないはず…まさかっ！

確かに家を出る時に鍵は閉めたはず、となると。

泥棒じゃねえか！

「…っ！」

落ち着け俺、こういう時は家に入っちゃいけない、中にまだいたら危険だ。

うむうむ、警察だろ。

いやいや、待て、もし親父の予定が変わって帰ってきてたら、警察呼んだら面倒だぞ。

ああ、どうすりゃいいんだ。

まだ零時前だ、こんな時間に泥棒が来るとは思えんのだが…

「うし…」

俺の判断はこうだ。

まず、お隣さんの傘を右手に握る、勝手にすいません、そして左手に110番と打ってあとは通話ボタンを押すだけで警察が呼べる状態の携帯電話…。

完璧だ…！

よし…

行くぞ…！

『ギイイイイイイ』

「おま、ドアうるせえよ！って…」

まずい…つい条件反射でドアに突っ込みを入れてしまった。

『ガタンッ！』

中から音が聞こえた、誰か…いる…そして気づかれた…！

『ドツタドツタ』

来た…！

やるっきゃねえ！

「うおおおおお！」

思い切りドアを開けて突っ込む、やはり中には人がいた、興奮して
いて、顔までは見えなかったが人影が確かに…！

『ボンッ!』

傘を狭い玄関で開放する、これなら手が出しにくいはずだ…!

「きゃっ?!」

『ドスン!』

耳につくような高い声と尻餅をついた音が聞こえた。

「…え、その声は……」

そっと、傘と閉じる、同時に彼女の姿が見えてくる。

「っ、月代?!なんで?!って…!」

うん、俺にはあったんだ、そんなことはどうでもよくなってしまっ

ものが、まあ、俺も一応男です。

「じー」

「いたたっ…もう、なによー…」

「じー」

「もう、蔵原くんおかえりなさい、で、これはなんのつもり、って…」

俺は、男です。。。

「ダウンロード…92%…100%…完了…!」

しっかり目に焼きつかせていただきましたよ!そのスカートの中っ!

おもむろにガッツポーズ。

「きゃあっ！スケベ！出てって！」

「いやここ俺の家なんだけ…っ！」

.....

「で、月代はなんで今日の今日に俺の家に…？」

赤く腫れあがった頬を擦りながら尋ねる。

「え？お父さんから聞いてないの？」

「いや、なにも？」

「つたく要領の悪い親父だぜ…」

「これ見て分からないかな」

と、ポケットから取り出したソレをひとさし指に引っ掛けてクルク

ルと回す。

「うん、鍵だな」

「そう、鍵だね」

「…頼む…分かるように説明してくれ…」

意味が分からなかった、まあ嬉しくもあった…

「蔵原くんまだ身体絶好調じゃないでしょ？」

「ああ、まあまだ…」

「うん、だから何か不備があると困るからって、蔵原くんのお父さんに、少しの間だけ蔵原くんのことを頼むって、言われたの」

「で？」

親父は心配性過ぎるにも程があるな…

「その…少しの間住み込みで、蔵原くんのお世話を…」

ちょっと照れくさそうに、微笑む、だが俺はそんな可愛い顔には惑わされない。

「駄目だ」

「えええ、なんで?!」

「おま、年頃の男女が1つ屋根の下って…そんなドラマみたいな話があるかつ!」

テーブルを両手でドラマのようにわざとらしく叩きながら、講義を開始。

「でもでも、こっちは頼まれた身だし、ちゃんと生活日とか貰っちゃったし…」

「んなっ!!俺の食費はどこだっ!?!」

ポケットを弄りながら、現在の所持金を確かめる。

「五百、六百…ひーふーみー…」

これで今月どう生きると…？

「んにひひ」

意地悪な笑顔で、財布を指で持ち、ぷらぷらさせる。

「おっ！おっ！」

右へ左へ、俺は獲物を目で追うかの様に財布を奪いにかかる。

「とっっ！せやっ！」

この様子だと、どうやら俺に金を渡す気はないようだ。

「この、てめっ…！」

「ふふん」

「……」

正座

「よろしい」

「いや、まだ諦めたわけじゃ……」

「じゃあ、力尽くで奪ったら？」

「女性に手を出すのは、紳士として許しがたいことなので……」

「ふうん？」

床に手をつく、そして。。。

「どうか、そのお財布と、お鍵を俺に、お渡ししてくれませんかっ
！」

『ゴッッッ』

床に額を落とす。

「ふひひっ、言葉が丁寧すぎだよー」

ああ、完全に尻に轢かれたな…

「それで、お返事はっ！」

「ヤダ」

「即答…」

まあもう、いいか、来客用の部屋が余ってるしな。

もともとは母さんと姉さんの部屋だったけどな。

「わかったよ、わかった。好きにしろよ」

頭をボリボリ掻きながら面倒くさそうに嘆く。

「へへん、やたっ」

おもむろにブイサイン、その指、押し折ってやろうか。。。

「部屋は空き部屋があるからそっち使えよ」

「うん、分かった」

「こっちだ」

月代を部屋へ促す際にふと思った。

「そいや、月代、俺の親のことかもう知ってるみたいだな？」

離婚したとかは、まだあまり公にしてないはずなのに。

「うん、お父さんから聞いたよ、お母さんとお姉さんで旅行中だった？」

ああ、そうか、親父の奴……嘘言いやがったのか。

まあ、面倒だしこのまま通すかね。

「そうそう、もうすぐ帰ってくるから、月代もここにあんまり長居するなよな」と部屋ここな」

「あ、ここね、さっき勝手に見ちゃったよ、よく部屋空いてるよね」

「あ、ああ、たまたまな」

混乱してきたぞ、これ明らかに矛盾してねえか？

「あはは、これはちよつと無茶な難題だったね」

くるつと振り返って俺に顔を近づける。

「んっ！あああ、やっぱりそうだよな、ははは、顔近いぞ」

もう、軽いことのように会話を交わす辺り、月代の優しさがうかがえた。

「まあ、言いたくなければ、聞かないけど、愚痴くらいだったら、

なんでも受け止めてあげるよ」

もっと顔を近づけてくる、キスでもしてやろうかと…

「ああ、サンキュな」

「どういたしましてっ、さてと、なんだかんだでもう、夜遅いからね、寝ようよ」

明日は月曜か、そうか、月代まだ学生だったんだな。

「おう、そうだな、ベッドだから、布団とかは問題ないな」

「うん、大丈夫、ありがとう」

「んじゃ、また明日な」

ドアを閉めようとした、その時だった。

「ねえ、蔵原くん」

扉越しに俺を引き止めた。

「なんだ？」

「ありがとう、泊めてくれて」

「ま、仕方なくだけどな」

「でも奪い返そうと思えば、できたよね？」

「まあ、どっちかっていうと、月代がそばにいるってことが、嬉しいってもあるな」

扉越しだからいいものの、俺の顔は真っ赤でFEVER中だぜ。

「そか」

「それがどうかしたのか？」

「うん、それだけ」

「そうか、おやすみな」

そういつて自分の部屋へ歩き出す。

「無理矢理、押し倒して、奪って欲しかったかな……」

「んなつ！お前！」

「冗談にも程がある、俺の理性を破壊しにかかっているのこイツは？！」

「冗談冗談っ、おやすみっ！」

『ガタン』

「あ……ん……」

そうして俺はその部屋をあとにする。

部屋に入った途端、急に睡魔が襲ってくる、最近疲れることが多いな……たく……

今日はとても長い一日だった気がする。

「ふぁぁぁぁ……寝るか……」

電気を消し、布団に入る。

「……………」

この静けさ、嫌いだ、早く寝たい。

早く明日になれっ！

また色々と考えてしまう。

毎晩毎晩、俺は心の中でこんな葛藤をしている訳だが。

いつの間にか寝入っているのだった。

……………

「……くん……」

寒い

「……はらくん……」

眠い

「蔵原くん！起きてよ！」

「ふえ？」

一瞬ボケていたがすぐに思い出す、月代がいることに。

「ふああ、なんあよ、寝かせおよ……ここによ……」

寝返りをつつて逆方向を向く

「ああ、もう起きてよっ！出ないの！」

「何があよ……」

「お湯っ！お風呂入りたいのっ！」

「なんだって？！お風呂？！」

目が覚めてしまった、ったく、男って奴は……

「きゃあああ！いきなりこっち見ないでよっ！」

『バシッ』

「いつてええ！何しやが…って、うおう！」

そこにはバスタオル一枚だけを纏った可憐な美少女がっ！

『バコッ』

「ぐはっ！服着てからこいよっ！」

「もう！いいからお湯の出しかた教えてよ！」

「わかったわかった、わかったけど、そっち向いたらまたぶん殴るだろうがっ！」

『ゲシッ』

「いてっ！まだ見てないだろ！」

さすがに頭にきた俺は振り返る。

『グギッ』

「ぬおっ！ぐは！」

女。。。強し。。。。

「くしゅんっ！」

「ああ、すまんすまん行くから行くからっ」

.....

「これをこっちに回すんだ、OK？」

「お、おーけー...」

このマンションのお湯の出し方ってちょっと変わってると俺も思っ

わ…

「よし、んじゃ寝るな」

理性がどうにかなっちまう前に視界から月代を消さなくては。

「うん、ごめん…」

「気にするなっていうのが無理あるが、気にするな、学校気をつけ
て行けよ」

「はい、おやすみー」

早々に布団に潜り込む、落ち着け俺、落ち着け、素数を数えるんだ…

素数ってなんだっけ…

まあいいか…

「それにしても見ないうちに月代も女性になったんだなあ、うむう
む」

ちよっと親の気分になってみる…アホかと…

「ZZZ…」

「って寝れるわけないだろうが」

そう、今日は鶯璃に会いに行くんだ。

会ってどうするかってのは、まあその場の成り行きに任せるとする。

「って今何時だ？」

ふと時計に目をやると、まだ朝の6時だった、俺も風呂に入りたいし、月代が出るの待つか。

「……」

ぼーっとしていると何だかだんだんと…

だんだんと…

………

寝てしまった…

「ふあわうあああ、つくうつ」

時計を見ると、すでに昼前の11時を指している、寝過ぎした。

覚束無い足取りで、浴室に向かう。

服を脱いで鏡の自分と目を合わせる、特に意味はない。

「そいやあいつ、洗濯とかどうするつもりなんだ、家に帰ってするのか、そうか」

自問自答、これが独り言のクオリティってな？

「あいつ風呂はシャワーだけでいいのかな？浴槽にお湯とか入れたほうが良さげ？」

俺はシャワーですませるタイプだから考えもしなかった。

「あいつシャンプーとかうちの使ったのか？自分にあったの使ったほうがいいんじゃないか」

女性特有のあの良い臭いってどうなってるんだろうか…

「あいつドライヤーとか、これでいいのかな？マイナスイオンがでるやつとかの方が良さげ？」

女性ってそういうのを遣ってそうだな。

「……………」

風呂から出て気づいた。

「俺、月代のこと心配しすぎじゃね？」

最初はああたったけども、いざ住むとなれば月代にあった生活スタイルに合わせるべきだと考えてしまう。

帰ってきたら色々と聞いてみるかな。

「うしっ！いくかつ！」

身支度を済ませ、気合を入れ準備万端、いざっ！

.....

私、月代千代美に与えられた、任務、命令は。

『蔵原裕登の確保』

とのことだ、確保ってなんなんだって、伯父様に聞いたけど。

とりあえず、蔵原裕登の身の安全と、何があってもすぐに対処できるように、近くに居ろ、とのことだった。

任務開始日は今日からとなんだか急だった。

蔵原裕登：

同じクラスであり、私にとって、頼りなる人間だった。

卒業前に告白をされたっけね、確か。

「ふふっ」

あの時のセリフ、臭かったなあ、でも嬉しかったのは確かなこと。

私も、蔵原裕登は気に入っていた。

あの時の告白だって御受けしたかった。

普通の女の子だったら、そうしてたよ、うん。

事情は分からないけど、裏で色々あるらしい、進藤財閥が絡んでい
るという話。

私は命令に従っていればいいだけ……

「蔵原くん、か…また会えるんだ…えへっ」

何であれ、蔵原裕登に会うことが楽しみだった。

「んゝ眠いゝ。。。」

突然夜中に呼び出されたのでとても眠い、携帯の時計を見るともう
夜中、いや明け方の4時だった。

「んゝ寒いゝ。。。」

真っ暗な道を女性一人が歩いていて良いものなのかと、なんかね。

すると、道端に落ちているソレを私は見た。

「あれ？何だろう…？人…っ！？」

慌てて駆け寄る、その人間は私の…

私のターゲットである、蔵原裕登だった。

「えっ！なにこれ？！どういうこと?!」

冷静になり現状を整理する。

落ち着け私、落ち着け。

「ふう…」

ようやく状況が把握できてきた。

なるほど、だから急な命令だったのか、身の安全か…

早速、任務失敗かな…

とにかくこれは内密なことだから警察はまず避けたい。

となると、親かな。

なんて説明しようか。

「うんしょ、ちよつとごめんね」

ポケットから蔵原裕登の携帯を取り出した、パカッと開くと、そこには。

「あ……………」

私？なんで？

再度試行錯誤を開始する。

「えーつと……」

蔵原くん、まだ私のことを…？

そついうことなのだろう。

「ん…あはは」

なんだか照れくさい、とにかく今は蔵原くんの安全を確保だね。

『ピッピッ、プルルル』

そのち

まさかこんなに早く、ことが荒立っているとは思わなかった…

5話 貴方との距離（後書き）

うん、すまんwなかなか本筋に戻らないねw
次回は本筋に乗るからね！

5・1話 明日を断つ者（前書き）

6話に行く前にちょっと一息、短編だったものを普通verに改良しました。

5・1話 明日を断つ者

極普通の家族、家庭。

それっていったいどんなものなのだろうか。

父親は働き。

母親は家事洗濯。

兄弟は学生。

俺も学生で。

そういった家庭がいつからか恋しく、憎むようになっていた。

そんな風に思い始めたのは、中学生になる少し前。

あれは春休みだった……

当時は、そう。

俺も極普通の家庭で育っていた。

ところがある日を境に、我が家にはいつも俺一人になっていた。

始まりは、父親の一言からだった。

「明人、急な話なんだが……」

その日の父親の様子は何かが変わった、嬉しさと悲しみが御互いに擦りあっているような、表情もなにか

重苦しい。

「ん、なんだよ、そんな顔して？」

「お父さん、急な仕事ができちゃってね、長い間帰らないと思うんだ。」

出張ならよくある事だ、いちいちそんな強張った顔で言うもんじゃない。

「あー、出張か、分かったよ帰りはいつになるかもう分かってるの？」

「あ、ああ、まだ分かってないんだ、それでだな。」

「それで?」

「冬真もちょっと連れて行くことになった。」

「はっ?なんで?」

何か踏ん切りがついたようで、開き直すように話し始めた。

「実はな冬真に婚約者ができたんだよ、凄いだろ!」

意味がサッパリ分らない、兄さんが?

まずその話しの起点はどこからなんだ。

「よく話しの流れが掴めないんだけど?」

「そうだな、手短に話すと…」

そこに母親が現れた、そして…

「私達、お金持ちー！！あっはっはっはっは！」

「お、おい、お母さん、落ち着いてくれって」

父親が有頂天な母を止めにはいるが。

「もうなんでも買えちゃう、できちゃう、最高よー！明人も喜びなさい！」

「あ、ああ…」

あまりの母親の迫力に言葉が出なかった、そして実の母親に恐怖感を覚えた。

「あ、兄さんはなんて言ってるんだよ、まだ高校生だろ？」

「当然OKに決まってるじゃない」

「そ、そう。ちょっと兄さんの様子みてくるよ」

金に飢えたような母の顔は見えていられなかった。

『コンコンッ』

「兄さん、入るよ」

「ああ……」

とても活気のない声がドア越しに聴こえる。

「兄さん、その許婚？の話は……」

「拒否権はない……」

「……兄さん」

.....

それから、父と兄は家を出て行き、母はと言つと...

金を使つては使いまくつて、家には滅多に帰つてこなかった。

たまに帰つてきたかと思いきや

「なにゴロゴロしてるの！勉強しなさい！勉強！」

その言葉だけが俺にとっての母だった、前は優しい母親だったのに...

金で人は変わるもんなんだと、俺は母を哀れんだ。

俺はその頃から、人間を信じられなくなっていた。

「よう進藤、今日暇？遊ばね？」

同じクラスの男子生徒達だった、遊びたい気持ちは山々だけど、なかなか気が乗らない...

やんわり断ろう。そう思っていたんだ、でも。

「あー、ごめん今日はちょっと無理、また今度な」

「…進藤最近、付き合い悪くね？」

そうかもしれない、でもお前に何が分かるってんだよ。何も知らないくせによくそういう言動が出てくるもんだ。

「ちょっと最近忙しくてさ、あはは…」

「んだよそれ、たまには遊ぼうぜ、気分転換も大事だって」

俺を心配してるようで、まったくしていないような言葉。ただ遊びに誘うための説得の言葉。

気分転換？はあ？ただの人数合わせだろうがよ。

「いやあ、でも外せない用事があったさー」

「大丈夫だって、行こうぜほらっ」

俺の右手を引つ張る、体勢が少し崩れてしまった。ただそれだけ。それだけで、俺の中のなにかが悪戯されている気持ちになった。

苛立った。

「うるせえな！無神経野郎！その薄汚い言葉が出るのはその口か？おい？！」

もう堪えきれなかった、俺の黒い部分をすべて吐き出した。

「はあ？！ふざけんな進藤！せつかく心配してやってるのによお！なんだその態度は？！」

驚きと怒りが同時にこみ上げた顔色だった、瞳孔が一気に開く。

「心配だと？！笑わせるなよ、ただのそっちの都合だろうが！目障りなんだよ！耳障りなんだよ！」

「もういい、おいみんな、やっちまおうぜこいつ」

「あん？なにがだよっておい！放せ！」

気づけば他の男子生徒にはらいじめにされてしまった、そして両足も掴まれ、身動きが取れなくなった。

「なにされるか、分かるよな？」

「くっ…」

畜生なんでこんなことに、痛いのは御免だ。これも全部、全部全部母さんの所為だっ！！

畜生！畜生！畜生！

『ドスッ！』

「がはっ！？」

そいつの拳が俺の鳩尾みぞおちに沈む。胃液がギョルギョルと上がってくる

ような、とにかく気持ち悪い。

いつそ早く気絶してしまいたい、痛い…

「デメエがよくそんな口たたけるな！」

二発目が沈む、なんなんだこの感触…まるで腹が粘土みたいにぼこぼこ潰れていく。

畜生！畜生！友達なんて大抵こんなもんさっ！ああもういい！

誰も信じられねえ！

そして三発、四発とローテーションして腹を抉られる。

「うええええ！ごぼっげぼっぐぎええ！」

いつまで続くのだろうか、もう痛みすら感じなくなってきたよ
うだと、もう俺は死ぬのだろうか。

人間ってこんなに脆いものなのだろうか、俺に救いの手は差し伸べ
られないのだろうか。

ああ、なんであの女子生徒は見てみぬ振りをして通り過ぎていつて
しまつのだろうか。

なんで誰も…

画面が赤黒くフェードインしてくる、もうだめだ…

俺はこういっしかなかった。

「いじめ…んなや…い…」

.....

ここは何処だろうか…

無機質な臭い、そして薬の臭い。

きっと保険室だろう。あのあとどうなったかは知らないが、どうやら生きているようだ。

まだ腹が痛む、まだ凹んでいる気がする。

そつと瞼を開ける、きつと眩しくてまた閉じてしまっただろうな。

そんな悠長な気分で開く、だが。

俺の瞼は開いたままだった。

「ん…」

漆黒に飲まれたその空間に俺はただ一人、ベッドの上にいた。

保険室じゃない、ここは病院だ。

辺りを見回せば月明かりが差し込む窓があった、そのカーテンに手をかけた。

「くっ！」

患部が痛む、それでもその窓の奥が見たかった、カーテンを開けばほら。あんなにも美しい月が僕を照らしてくれる。

「あ、あれ」

なにかが頬を伝い落ちた、涙？どうして？

悲しいから泣いている？

泣いているから悲しい？

そうか、思い出した。

俺は大切なものを失くしてしまったんだ。。。

いや、そんなことはない、あんなものは大切でもなんでもない。
捨てていいものだったんだ、人間を信じた哀れな俺に対して涙を流
しているんだ、絶対に。

「畜生……」

それでも今の涙の理由は違った。

「いったい俺は…誰の所為にすればいいんだよ…」

行き着く場所のない答えに俺は今、涙している。

考えれば考えるほど、心が病んでゆく。もう寝よう。明日から俺は…

退院はすぐだった、母は病院に金を渡してすぐさま何処かに行ってしまったらしい。

俺は覚束無い足取りでただ一人、我が家…いや、監獄に帰るのだった。

学校にいつでも誰とも口を利くつもりはなかった。

心配して情けをかけてくる生徒も完全にシャットダウンした。

そして気づけば学校で虐められ。

毎日毎日、同じことを繰り返して…

でも時間は止まってくれない、俺もこのまま学校を卒業して、多分また同じことを繰り返すんだと思う。

その螺旋階段の中で、2年間。

そしてある日

「俺達と友達にならないか？」

なんてな、馬鹿かと思ったよ。

信じられるかそんなこと、俺と？友達に？

冗談もほどほどにしろと。

「意味分らないんだけど？」

俺はこの二人を突き放した。

「いいから帰ろうぜ進藤明人」
しんどう あきと

「うん、帰ろう帰ろう」

それでもこの二人は磁石の様に戻ってくる。

「え、ちょま、放せよ！」

腕を月代千代美つきしろ ちよみに引っ張られ、仕方なく、一緒に帰らざるをえなかった。

下校中。

「進藤くんって趣味とかあるのー？」

なんでこんなに馴れ馴れしいんだろうか、なにが目的なんだろうか。

「おい、月代、あんまり無理強いするなよ」

蔵原裕登くらはら ゆうとくが割やってはいいる。

「でも、進藤くんのこともっと知りたいし」

「なんなら俺のこと教えてやるよ」

「別に何も知りたくないし」

「えーと、俺の趣味はだな」

「って勝手に進めるなあ」

「ゲームだぜ、それ以外には何もない！」

「この今時の典型的な男子がっ！」

「典型的とか言っつなよ、この典型的女子」

「ひどっ！それはヒドイよー！」

こいつらなに言ってるんだか……

でも一つだけ同意できる場所があった。

「ゲーム…俺も好きだよ…」

おもむろに口を開いてしまった。

「お、進藤もゲームやるのか、あれは人類の糧になるよなー」

「進藤くんも典型的な男子だった…」

典型的とか言われた、ただそれだけだったけど…

「くくっ」

思わず笑ってしまった、なんか悔しいな。

「あ、進藤くん笑った？」

「別に笑ってなんか…」

「いや、笑ったな」

「……………」

黙ってよう…そう決めた。

でも二人は満面の笑みだった…

俺に構うなんてよっぽどの暇人なんだなあ。

……………

「よう進藤」

「帰ろー」

それから毎日毎日、校門で待ち構えてる二人。

心の片隅で少しずつこの二人を信用してきている自分がいた。

そしていつからか、そこにいて当然かの様に思ってしまった。

あまり会話はしなかったけど、蔵原裕登と月代千代美の漫才？は見
てて飽きなかった。

もういつそこいつら色に染まろうか、なんて思ってしまう。

ただ一緒に下校してるだけなのに、なんでこんな惹かれてしまうの
か。

そんなある日、蔵原が言った。

「なあ進藤」

「なに？」

今では普通に会話できる状態だった。

「そろそろ、こっちに来ないか？」

「え？」

まあ、なんとなく意味は分かっていたんだ。

「進藤くん、まだ私達のこと友達だっと思ってないでしょ？」

月代が顔を覗いてくる。

「……」

「あと一歩だ、お前はまだ変われるし、変わってもいい」

「友達って思うだけで、とっても変われると思うよ」

二人の言葉が、まだ極普通の家庭だった時を思い出す。

そうだったな、友達ってのはこういう。。。

「俺は…」

応えは当然決まっていた。

「うん」

「ああ」

この相槌に応えなくてはい。

「俺は、本当はこんな暗い性格じゃない、昔はもっともっと、やんちゃで明るい性格だったんだ！」

何も言わずにニコニコしてる月代と、歯をだしてニッコリしてる蔵原と。。。

「だからって突然戻せる性格でもない、だから、少しずつ…」

負けたよ、この二人には。

信じるよ。

「友達として、少しずつ、友達みたいに。友達に…」

「日本語分かるか？友達だろ俺達？」

右手を差し出す蔵原。

「友達みたいにじゃなくてねっ」

左手を差し出す月代。

「うん、友達」

その手をがっちり掴み、友達という存在を掴んだ。

それから中学を卒業し、高校生になって。

高校でも友達はまあまあできた。

それでも一番の友達。

いや、もう親友のつもりだけど、蔵原とは暇さえあればすぐに遊ぶ、そんな日々を送っていた。

今日もゲームセンターで蔵原と待ち合わせをしていた、アーケードゲームでちゃっかり三千円使っていたが気にしない。

そして蔵原が来て、話を聞くところ…

どうやら月代に告られた、らしい？

まあ、別に前々から二人とも仲良いと思っていたから、何を今更って感じだった。

ファミレスで蔵原は色々と近況を話してくれたわけだが。

「進藤、お前、虐待って受けたことあるか？」

なんて、突飛押しのないことを言い出した。

「いや、ないけど、勉強という拷問なら…」

含み笑い。

「やっぱお前ガリベンだったんだな…」

「いや、その、違うんだ勉強してるつもりでゲームキャラの育成過程を考えてたりだ。」

「あるある…」

「あるよな」

と、話の腰を折ってしまった。

「ああ、それで虐待がどうした？」

「いや実は先日、俺と同年の子で鵜瑠って言うんだけど、そいつが虐待っぽいことになってたな」

「それで助けたのか」

蔵原が人を助けないことは滅多にない。

はずなんだが…

「いや、びびって逃げてきた…」

「あるある…」

「あるよな」

「いや、蔵原の場合ないかな」

最近ちょっと蔵原の様子がおかしい気はしていた、なにかあったのかな。

「いやでも、後日またリベンジに行こうと思っている」

ああ、今考えたこと訂正する、やっぱり蔵原は蔵原だ。

「さすが…」

「んで、相手が強かったらどうすればいいか、分からないんだ」

いつもと何か違うな、普段はクールに試行錯誤できるやつなのに、なんで俺なんかに。

「まず、戦うという概念を捨てよう蔵原…」

「いや、ゲームだと絶対戦うだろ」

「あるある…」

「まあこれはゲームじゃないし、慎重にいうとは思ってる」

これは何気なくマジな話かもしれないな。

「まずは、その虐待されてる子と独立して、話すことがいいと思うぞ、なにか事情があるのかもしれないし、まずは確認を取ってからだと思う」

マジに応える。

「なるほどな…」

蔵原も結構マジな顔をしている、とりあえず俺の考察をすべて聞かせておくか。

.....

「助かった進藤、悔しいがやっぱり頭のできが違うな」

「それほどでも」

「よし、帰るかな」

もう11時か、俺も眠くなってきたかな。

「じゃあまたっ！生きてたら会おうな！」

「じゃあ次はないか、さようなら」

「おまつ、ひでえ…」

「へっ、またな進藤」

蔵原の後ろ姿を見守りつつ、何かに気づいた。

「ん、あれは…」

さつきからそうだったが、黒いコートの男女二人組みが俺の視界から消えない気がする。

ファミレスにもいたような気がするし、ゲーセンを出た時も見かけた気が…

後ろ姿の蔵原と、後ろ姿の男女二人組み…

「蔵原を尾行している…？」

明らかに蔵原の視界外から見張っているようにしか見えない。

「怪しすぎるぞ…」

俺もその尾行者を尾行するにしたら、蔵原になにかあったら大変だ。

この時間だ、人通りが少ないので、こちらにも気づかれる可能性も高い。角を曲がることに追いかけよう。

コートでよく分らないが、一人は背の高い銀髪の男。

もう一人は月代と同じ位の背で、赤い髪の女。

個性豊か過ぎだろ…

角を曲がったので追いかける、冷や汗かいてきた…

あいつまた何かやらしたのか？

また角を曲がる…

また追う

曲がる

追う

ふと。

あれ、蔵原の家までってこんなに角あつたっけか…？

曲がったら追うという戦法じゃ蔵原の姿が確認できないために。。。

もしかして尾行じゃなくて、たまたま道が同じだったとか…

「あるある…」

尾行に必死で気づいてなかったようだ。

「蔵原の家、通り過ぎてるじゃん…」

つまり、今俺は無意味にこの二人を尾行していると言つ訳で……

「帰るか…」

と、普通に陰から姿を現し、歩き始めたのだが。

「うっ…！やべっ！マジか！」

黒いコートの二人組みがこっちに向かって走ってくるじゃないか。

くそっ！俺の尾行にもう気づいていたってことか！

ってことはやはり蔵原を……

「え、どうすりゃいいんだよっ！」

あと3秒もすれば二人は俺の目の前だ、やるしか…！

よりによって人気の無い所で…

ここまで誘導されていたってわけか…

「こいつ！」

速い…！

赤い髪の女が俺の足元にしゃがみこんだ

「くっ！あまいわ！」

この体勢…水面蹴りだなっ！

「おりゃあ！ A！」

予想通り女は水面蹴りをしてきた、すかさずジャンプし、その勢いで蹴り飛ばす。

「ぐあっ！コイツ！」

やべえ、本気にさせたか。

次は銀髪の男がストレートにパンチしてきた、防御体勢に入るが。

。

「ぬおっ！」

なんだこの馬鹿力…腕が折れそうだ…！

「いつてえ…」

勝てる気がしない、これは逃げるしか道はなさそうだ。

「まてこのっ！」

「ちょ、くそ！」

女が俺の足にしがみつく、これでは相手の思うつばだ、なんとかしねえと。

「しかたねえ…すまんな譲ちゃん！」

その場でしゃがみこみ女を抱き上げる。

「ふえ！やめろ！」

うまい事この女を盾に使う。

男も動揺しているようだ、よし！

「ほらよっ！」

女を男の方へ投げる。

「きゃあ！」

反射的に男は女を抱きかかえる、よし！

「そこだ！ B A！」

『ゲシッ！』

「ぐはっ！」

男の脇腹に力いっぱい蹴りを入れる、骨までいったか？

その場で墮落する二人組みを見て、俺ってなかなか強い…

これがゲームマークオリティ…

逃げた方がいいのか、それとも取り押さえるのがいいのか、考える内に。。

『カチャ』

「動くな」

男の手に握られていたものは…

「うつ…」

思わず声を失ってしまった。

「ふえ、フェアじゃないんじゃないかそれは？」

拳銃だった。

「この仕事にフェアもアンフェアもないもんでね」

「さいですか…」

女には結構ダメージがいったようで、へたり込んでいる。

「そのまま、付いてきてもらおうか…」

「お、おーけーおーけー…」

目隠しをされた。

.....

俺が連れてこられたのは、普通の家のようだ。

部屋全体はラグな感じなオレンジをモチーフとした木材部屋ってところか…

手を縛られ、足も縛られて、動きたいのに動けないこのもどかしさ。腹が立つてくる。

今この部屋には赤髪の女と俺の二人。

「コーヒーでも飲む？」

「じゃあこの縄解いてくれませんかねっ」

「ひひいゝダメ」

外見からするとこの女、俺より年下だということは明らかだった、
というか小学生か？

そしてツインテールとはまた…。

「それで、アンタの名前は？」

「いわないとダメでしょうかね」

「死にたいの？」

「進藤明人です…」

このガキが……

「あら、進藤家だったのね、それはごめんなさい。解いてあげるわ。」

「え？あ、ども」

進藤家を知ってるのか、こいつらいったい何者だ。

「コーヒー飲む？」

「あ、いただきます」

『グビッグビッ』

「ぶはぁー」

「コーヒーってそうやって飲むものじゃないわよ」

「いや、とりあえず落ち着いたんで」

「あ、そう、それにしてもアンタ、強いよね」

俺もなかなかそう思う。

「いや、ああいう実戦は初めてだったけど、ゲームの真似を…」

「ゲームって凄いのね」

「凄いですね」

「なにあの A！って」

「コマンドだ」

「…あ、そう…」

なあ、俺一応監禁されてる身なんだけど、なんでこんなにアットホームなん…？

「あの、聞いてもいいですか」

「なによ」

そう言っつて、ポケットからサバイバルナイフを出す。

「蔵原を…いや、俺と一緒にいた男を尾行してました？」

「ええ、してたわ」

ナイフをクルクル回して遊んでいる。

「それはなんで？」

「それ以上聞くつもりな命の保障はしないわよ？」

ナイフを俺に向ける。

「……構いません」

「あ、そう、まあ進藤の人間なら話てもなにも問題ないんだけどねえ」

「はあ…？」

「あんたが進藤家じゃなかったらもう首ないわよ」

「マジすか…」

進藤に生まれてよかったです本当に…！

「まあ、黙って聞いてなさいな」

「お願いします」

『シユルル』

ナイフをしまつてイスに座る女、女性？女の子？まあいいや。

取調べでも受けているかのように、緊張した。

「簡潔に話すと。そうね、アンタのお兄さん。それが進藤家を財閥したきっかけなの。」

「そうだったのか…」

まあ、金持ちになつたのは実感していたがまさか財閥にまでなつていたとは初耳だ。

「アンタのお兄さん、つまり冬真さんは、榊原財閥に婿入りするってことね、その代わり進藤家にお金を投資してるの」

「なんで兄さんだっただんだ？」

「誰でもよかったのよ、ただお金がもらえる。でもその分の代償は大きいけど。アンタの母親は金欲しさに冬眞さんを売ったって感じかしら」

「…そっか、それで？」

「でも冬眞さんの許婚、さかきばら ひより榊原鶯璃さんに手を出した馬鹿がいるのよ、
そうなると婚約は解消、進藤家は金を投資してはもらえなくなるの」

「その、手を出した馬鹿って…」

「蔵原裕登ね」

あのヴァカ…しかも鶯璃って、例の虐待のか…

「でも、手を出したって、そこまでなにかしたんですかアイツ」

「まあ、キスもしてないし、御互いのことなんかサッパリ知らない
でしょうね、ただ」

「ただ？」

「そんな些細なことでも見逃せない訳があるのよ、あまり詳しくは知らないけどね」

「はあ、それで、蔵原を攫ってもう会わせないようにと？」

「いえ、攫うんじゃないくて葬るつもりだったわ」

「…っ！」

「冗談よ」

「ったく…」

「ふふっ」ごめんなさいね」

「でも進藤家に金がなくなってもあんたには何も関係ないんじゃないか？」

「あるのよ、おおありよ」

「どのように？」

「進藤家は親のいない子供達の為に、施設に寄付してくれているのよ、今その寄付がなくなったら…弟が…」

なんとなく事情は理解できた、なんだか頭がこんがらがってきたが…

「なるほどね…あまりはつきりとは飲み込めないけど、状況は理解できたよ。」

「それでアンタ」

唐突に冷たい目になった。

「進藤家に金がなくなったら、アンタ自身も苦しい生活になって、

母親も金がなくなること、精神的にいつちやつかもね。お兄さんも用済みで帰ってくるでしょうし」

「……」

「それでいいの？」

そこまで考えていなかった、今母親は金に飢えた人間で…それがなくなったら…考えたくもない。

攻められるのは当然兄さんだ、それに俺が今学校に通えてるのだから兄さんのおかげで…

どうしたらいいんだ…

「どう？アンタの立場が分かった？」

「ああ…」

「まあいいわ、なるようになれよ、あとは私達がなんとかする。それとっ」

顔を近づけてくる

「いつ、なんですか」

「ここから出たい？」

「とっても出たいです」

「ならちよつとゲームしない？」

「ゲームとな？」

「アンタの知ってること、全部教えて、それが本当だったら、餓死」

餓死と…

「あはは、嘘だったら？」

「フルボッコで撲殺」

「どちらにしろ死ぬんですね…」

なんて理不尽な…

「まあ、一つだけ、助かる方法はあるわよ」

「それは？」

「言っわけないじゃない」

「あるある…」

「さ、教えなさい」

教える前提で話が進んでるな…ここで俺が蔵原の情報を教えたら、虐待されてるかもしれない子を見捨て、蔵原の恋は邪魔してると…

言わなければ、進藤家が潰れる可能性が少し増えると…

家庭を取るか、友情を取るか、か…

何かいい手はないか…

『ガチャ』

銀髪の男が現れた、綺麗な顔をしている、年は二十台前半ってところか。

「なにか聞き出せたか？」

「こいつ、進藤の人間だったわ」

「ほう、そうか」

「今ゲームの最中だから邪魔しないでね」

「またあのゲームか……お前も好きだな、正解できる奴なんていないのに」

「でも正解はあるんだよ」

「ぬぬ……」

頭が痛い。

「ほら考えてる考えてる。」

「ちょっと黙っててください」

「はいはい、自分が大事か、他人が大事かだね」

自分も大事だし、他人もそれ同様に大事だ…どうしたらいい。

あいつ、蔵原ならどうするか…

他人ばっか考えてるやつだし、でも最後には御互いに笑いあえていく…

過去から今までをすべて振りかえっても、答えは出てきそうにない。

「このケーキもらっていいか」

「あ、だめーそれどっちも私のー」

「どっちか一つにしるよ…」

「だめー！」

ケーキか……

「そのケーキ俺にもくださいな」

正直に食いたかった、それだけだ……！

「な、なんでよ、アンタは考えてなさい」

「いやあ、糖分が大事なもんで、そっちも俺を監禁するならそれなりに世話つてものをしてくれないとですね」

「あ、そう」

華麗にスルーですか。ちょっと弄るか……

「それ、口癖なんですか？」

「ああ、こいつの口癖なんだ」

すぐさま俺のあとに銀髪の男が告げ口する。

「ですよー、子供ってすぐこついう変な口癖が…」

『ゴスッ』

「ぐほっ！」

「ちょ、二人とも意気投合しないで！そもそもアンタそんな悠長でいいわけ?!」

ふむ、確かに悠長だけど、さっきケーキの奪いあいで気づいてしまったんだ。

この手のクイズは数学の本で読んだことがある、ただその出題の仕方を変えただけだ。

これはただのパラドックス、結構メジャーで有名なトリックだ、所詮子供騙しだな。

「まあまあ、気分転換も大事ですよ」

もう少しこいつらから情報を聞き出さなければ、帰るわけには行かない。

「アンタ、どうせ時間稼いで、私達からなにか聞きだそうとしてるんでしょ?」

ツチ、勘のいい子だな…

「あちゃー、ばれちゃいましたか」

「別に何も話す気もないわよ」

しょうがない…さつさとこの馬鹿げたゲームを終わらせて…

「おーけー、答えは出たぜ」

「え、あら?はいね」

「ふむ、聞こうか、お前の答えを」

俺を舐めるなよ、これでも名門校の一員だぜ？

「いいだろう、蔵原は近い内にその榊原に会いに行くと言っていた、明日かもれないし、明後日かもしれない」

「ふむふむ、で？終わりかな？」

「いや、これって本当かどうか分かるのは、今じゃないだろう、でも俺はもう解放されたいんだ」

「うん？」

「確かに蔵原はまた会いに行くと言っていた、そして…」

「そして？」

「このあと俺はフルボッコで撲殺される」

「……ん」

これで決まりだ。

「……正解だよ、やるじゃない」

「ほらな」

お解りだろうか、この意味が、もしこの蔵原情報が嘘だったら、俺はフルボッコで撲殺だが。

フルボッコされると言っておけば、それは本当のことを言っているということになる。

つまりここに矛盾が生まれるわけだ。

「ほう、やるじゃないか、このガキ」

銀髪の男が微笑む。

「それでもIQ百六十あるんで」

「私は百八十だけどねー」

「んなんだってっ!」

まあどうせ、子供か。

「ふう、仕方ないな、出したげる」

「いやっほう!」

すぐさま立ち上がり、ガッツポーズ。

「階段を上げればどこかスグに分かるわよ」

「そうですか、短い間、お世話になりました」

これでも明日学校なんだ、早く寝ないと遅刻しちまう。

「ねえ、待って」

「なんですか？」

「その、あんたの頭脳は大したものだわ、ええ、今後私達にも使えるような…」

「はい？」

「だ、だからっその、あんた！特別に仲間にしたげるって言ってるのよっ！」

「丁重に遠慮しますね」

「うっうっー…権ちゃん…」

「その渾名で俺を呼ぶな」

「うー」

なんなんだこいつらも漫才師か？

「まあ、進藤明人、杏がここまで頼んでるんだ、少し手を貸してはくれないか？」

「た、頼んでなんかっ…」

「素直になりなさい」

「うー」

大人の人間に頼まれるとなんだか説得力あるなあ。

それにこいつらと組んでおけば、なにかあったときに、すぐ動けそうか。

俺が進藤家の人間なことで何か役に立てるかもしれない、別に同情してるわけじゃないが…

「分かりました、手を貸しましょう」

「ありがとう」

「べ、べつに無理に仲間にならなくてもいいんだかねっ！」

「はいはい、無理してませんよ、その前にお名前を御聞きしてよろしいでしょうか」

「ああ、俺は水志権夷^{みずしけんい}、ちょっとわかりづらい名前だが、水志と呼んでくれ」

「分かりました、水志さん」

「こっちの馬鹿は二ノ宮杏^{にのみやあんず}、杏でいい」

「勝手に決めるなあー！それと馬鹿じゃないー！」

本当に大丈夫なのか心配なところだが、頼もしそうだなによりだ。

「ちなみにさっきの蔵原情報は嘘じゃないですよ」

「あら、そうなの？答えが分かってるんなら嘘ついてもよかったじゃない」

「まあそのままもし、蔵原とその女の子がくつついたら、俺的にも困るところはありますし、かといって蔵原の邪魔をするつもりはありません」

「なんか矛盾してないかしら？」

「ええ、俺は図々しく、杏みたいにとっちも貰っからな」

「ふ、なるほどな」

水志は察したようだ。

「え？なに？どゆこと？」

「やっぱり子供か…」

「さてでは俺は帰りますね、失礼します」

「え、あ、ちょ」

華麗にスルー。

「ああ、今後ともよろしく、ちなみにここは…」

『ガチャ』

重い扉を開ければそこは

「うおい、ここ地下室じゃねえか」

四方八方コンクリの壁に声が反響しまくっている、五月蠅いこと極まりない。

足音が異様に響くと、恐怖感を覚えるのは俺だけか？

そして階段を少し上って頭上に押し上げるような扉がある。

「これか？よいしょ！」

『ドスンっ』

「こゝ、ここはっ？！」

後ろから水志さんが呟く。

「進藤宅の庭の地下室だ…」

「俺んちかあああああ！しかも地下室なんてあったのかあああああああ！」

そこは母がいつも手入れしていた庭園の花壇の中央だった。
こんなところに…

「え、じゃあ二人ともとくに俺のこと知ってたんじゃない？」

「いや、この街に来たのは今日が初めてだ」

「じゃあなんでここを？」

「さーて、なんででしょうかねっ」

「ふむ…」

さてはて、どうやらこれからの俺の道は、過去の螺旋階段とは大違いで、自分で階段を作っていくかのよう。

この階段、俺なら絶対にエスカレーターを付けてみせる……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9396c/>

天秤にかけられた少女

2010年10月23日15時57分発行